川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No. 284

新春号

昭和廿二年一月一日第三種郵便物認可
昭和廿六年一月一日發行第六卷第一號（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通卷二百八十四号

情友

麻生路郎

原子病の永井隆博士が近ごろ重体であると、ラジオや新聞が報じている。永井博士については今更紹介する必要もなかろうと思うが、博士の著書「生命の河」に式場隆三郎氏が書いていられる序文の一節に、

永井氏は篤いカトリックの信仰と高遠な医学者としての知見をもつて、この悲惨な戦争の犠牲になつた幾十万の生霊に代つて、世界最初の原子病の記録を書きあげた学徒である。もう余命いくばくもない重症を自覚し、生あるうちに正しい記録を残そうとする悲壮な心情を想うとき、私たちは泣かずにはいられない。しかも深い信仰に貫かれて少しも動揺することなく、静かに運命を見守つている立派な態度は、まさに聖者の面影があるといつても過言ではない、と述べられている。

こゝに掲げた写眞は、去る九月に、永井博士を長崎の如己堂に見舞われた下関鉄道病院長、医博坂田良一氏（柳号良坊）と病床不離の永井博士の近影である。

坂田氏は永井博士と同窓の友であり、自分も刀圭界にあるだけに、「原子病に倒れし君を見舞ひしてただ祈るのみ力なき我」と友情の涙にも一段と深酷なものがあるのである。去る十一月七日坂田博士夫妻が、京洛の地へ銀婚旅行をされた際、永井博士から「よりそひて紅葉ちらさぬ二人旅」「三十五年の夢や一夢寝台車」の川柳二句をおくられたそうだ。あながち名句だとわ云えないが、一等寝台車に欣然と寄添うている友人夫妻を想起し、如己堂の病床から祝福されたものであろう。

長崎医大の教授だつた永井博士は、一九四五年八月九日長崎の空に一瞬ひらめいた大きな光による原爆記録「長崎の鐘」、「生命の河」（原子病の話）、「この子を残して」等々を世に送られたのであるが、更に執筆の労をとられていると聞くので博士の余命の一日も永からんことを祈るものである。

終りに、病重しと聞く永井博士に拙吟を捧ぐ、

如己堂になぐめ顔の雀が来

病床不離の永井隆博士と坂田博士

本社新春句會

一月六日午後五時半から大宝文化会館（南区三休橋南詰）で新春句会を開催いたしますから賑々しく御來会下さい。兼題「三ケ日」路郎選「梯子酒」沒食子選「ポチ袋」翠光選、各題三句、余興（漫画劇・醉虎座談会・句相撲）其他

上方旅行

なつかしい 史蹟 高野山
なんばから2時間30分

あたらしい 名所 和歌山市 加太
日本観光地百選「海岸」第一位入選
和歌浦・友ケ島
なんばから1時間20分

南海電車

川柳は社會を反映する

——これからの政治家に與う——

川柳は社会詩だとか、諷刺詩だとか云われるだけに、あらゆる短詩型文学の中で、社会情勢を反映することの尤も甚しの一挙手一投足に至るまで詠まれる。公人私人の差別なく、その行動、その心境を忌憚なく詠出することは云うまでもなめる可能性となるのである。斯うした短詩が、ひろく読まれ、ひろく作られると云うことは世のため人のために大きな力であるが、單に文学に興味を持つ人たちによつてのみ、ひろく読まれ、ひろく作られるだけではまだ足りない。建國の方針として文化國家を目指しながら、文化國家らしい予算を計上しない爲政者に対して先づ川柳を味読すること、すすんでは川柳に入門することを奬めたい

そして社会人心のおもむくところを川柳を通じて知悉し、眞に文化國家、平和家國としての善政を布いてもらいたいのが私の念願なのである。利権の獲得や党派的争覇に終始することが民心から遊離した政治となるであろうことは諸君の方があまりにもよく知つている筈である。

政治家で古くから川柳を理解し、川柳のために一びの力をかされたのは古島一雄翁であると云われているが、その亞流を汲む政治家に対して、常に川柳のよさを說かれたかどうかは判らない。

今後、新らしい政治家、新らしい爲政者として起つほどの人達は必ず、その第一課として川柳を学んでもらいたい。

何んの川柳ぐらいと軽くあしろうことによつて諸君は新らしい政治家としての存在も同時に喪失するであろうことを知らなければならぬ。私の旧作、

「春の艸代議士などに踏まれるな」

をよく〳〵玩味されたい。（路郎）

金詰りも詠まれる。税金攻勢も詠まれる。老らくの恋も詠まれる。役人のにぎ〳〵も詠まれる。市井の心中沙汰も詠まれる。大臣の一びん一笑からルンペンいものである。

従つて川柳を詠むことは社会を知ることであり、人心の帰趨を識ることであり川柳を詠むことは更に深く人世を知悉し、如何に生くべきかを如実に把握せしい。

新春号目次

表紙……山比種三郎
川柳は社會を反映する……麻生路郎…(三)
風流紙芝居……前田伍健…(八)
小說・將軍娘……山路閑古…(四)
親愛なるS・Z君……山根白星…(八)
語源探究（1）……浅田右聞…(九)
川柳への愛情……藤本溟年…(一〇)
お宝の話……吉田水車…(九)
隨想……静岡忠八…(九)
リレー隨筆くるまたんぎ……東野大八…(一〇)
友情……麻生路郎…(一一)
旭町ジャングル……須崎豆秋…(一〇)
詠史川柳「にっぽん」(五)……戸田古方…(一〇)
郵信(3)……福田山雨楼…(一六)
★
不朽洞句帖……麻生路郎…(一五)
近作柳樽……麻生路郎選…(一二)
川柳塔……麻生路郎選…(一六)
同舟近詠……諸家…(一二)
課題吟「聖書」……高鷲亜鈍選…(一二)
各地柳壇……(一三)
動静……(一六)
不朽洞会から……(一七)
川柳不朽洞会名簿……(一六)
編輯室にて……(一八)

將軍娘（一）

山路閑古

（一）

駿河の靜岡は、德川家康が雄図成り、七十五年の生涯を終へた地として知られてゐるが、又末世の子孫である慶喜が、幕府三百年の世帶を疊んで隱退したのも此処で、まことに因果はめぐる小車の感が深い。

慶喜は明治二年に靜岡に下り、一時宝台院といふ寺に謹慎の狀で居たが、間もなく附近に住宅を構へ、妻妾を東京から呼び迎へたりした。この邸は後に浮月といふ料理屋の手に移つたが、その間慶喜は十男十女の父親となり。子孫繁栄の爲邸内漸く狹隘を來すに至つた。

明治二十年の秋、同じ土地の西草深といふところに、宏壯な邸宅を新築し、永住の目的を以て移り住んだが、明治三十年計らずも勅勘を解かれ、從一位宣下、特授公爵などの恩命さへ加はつたので、慶喜は久々にて上京し、宮中に參内して御礼言上した。さうしてそのまゝ東京に止まり、靜岡には歸還しなかつた。西草深邸もやがて奏ホテルといふ旅館に変り、日露の役には俘虜收容所に宛てられたが、この頃不幸火を発し、さしもの宏大な邸も一夜にして灰燼に歸した。作者はこの頃はまだ幼く、この火事も母親の背に負はれて見てゐたやうな次第であるから、篇中に活躍する人物とは、時代に於て少しく開きもあるが、以下の物語は、右のやうな史実を背景として、追憶談の形式を以て展開せられる。

夏の暑い日であつた。私は靜岡の西北端にある浅間神社といふ社の境内で、蟬をとつてゐたが、その蟬をとつてゐる現場を、たま〳〵見廻りの神主につかまつた。

神主は境内の瓢箪池のほとりを歩いて來て、ふと一本の大椋の樹の下に立ち止り、暫く小手をかざして梢を仰いでゐたが、いきなり嚙みつくやうに怒鳴り立てた。

「こら、曲者。下りんか〳〵」

その大椋の樹の上に、私は身体を細めて隱れてゐたのである。が、見顯はされては致し方もないので、先づ黐竿を投げ下ろして、その後から枝傳ひに辷り下りようとした。下りた途端に黐竿を引担いで、逸早く逃げ出す積りであつた。相手は白い淨衣に白い袴をつけた。よぼ〳〵の老神主であるから、敏捷に行動すれば逃げられないことはないのだつた。ところが悪いことに、黐竿には新しい鳥黐がこつてりと塗りつけてあつた。それで重心が狂つたか、竿は落ちて行くはづみに、着物の裾に絡まり、あちこちの枝に引掛つて、もんどり打つて地上に落ちた。さうして最後に神主の白い袴の裾へ行つて、べたりとひつついてしまつた。これが爲に、

「うわ。こら。何をするか。馬鹿。」

とばかり、神主をして更に大きな声を出させることになり、所詮逃げることなどはあきらめねばならなかつた。私は観念の目をとぢて、靜かに樹を下りた。

神主は、声の大きい割合には、人の好ささうな老人で、何処か追放の人士を思はせるものがあつた。慶喜と共に追放されて、靜岡へ來てゐる旧幕臣の成れの果、人品骨柄、士着の人とは違ふのである。黐竿を袴の裾から引き放しに、私の近寄つて行くのを、手を束ねて待つてゐる鷹揚さが、大身の旗本と云つたやうな塩梅で、こんな老いぼれなら、或は逃げられたかも知れないと、今更後悔した位であつた。

「馬鹿。殺生禁断の境内で、蟬をとる奴があるか。貴様は小学生だな、何年になる。」

「四年です。」

と私は答へた。

「大方落第坊主だらう。馬鹿。」

「いゝえ。ぼくは全甲だから、落第坊主ではありません。」

「くそ。小癪な奴め。それでも全甲か、では貴様は、鳥居の前の制札の漢文が読めたらう。何と書いてあつた。」

「一つ、境内に於て鳥獸を捕ふべからず。」

「それ見ろ。」

神主は威丈高になつて、更に何か云はうとして、舌なめずりした。その時私は云つた。

「だが、虫を捕るなとは書いてありません。」

神主の舌なめずりの舌は、そのまゝ出しつ放しになつてゐた。開いた口が塞がらぬといふことは、実際にあるらしい。——

禰宜か社掌か、いづれは一見識ある神職であるから、そのまゝでは済まなかつた。神主は私をつかまへて、徐ろに説教を加へるのだつた。

鳥獣と云へば、虫魚もおのづからその中に入るのだ。総じて神のまします境内で、生きものを捕ふるなどは、慈悲憐愍の神慮にも違ひ、以ての他の所業と云はねばならぬ。汝も小学の最上級とあれば、その道理は判る筈だ。又小生意氣にも老人をやり込めるなどの了見は、生ひ先きの程も思ひやられる。その悪い了見が、放火、强盗、詐僞、脅喝あらゆる諸悪の業因だ。御詑

びしろ〳〵。神に御詫びしろ。素直に神の前に名を申上げて、御詫びをしろ――。

神職などゝいふものは、又弁舌のさはやかなもので、その神懸つた御説教は子供などを感ずるには充分であつた。怖いもの知らずの腕白の私も、これにはすつかり縮み上つてしまつた。

「素直に名を云つて、御詫びをしろ。」

「瀬本欣三です。御免。」

「瀬木？」

と云ひさして、神主はチラリと私の顔を見た。

「瀬木権大夫の伜か。」

「さうです。」

「ふん。似てゐやがる。親が親なりや、子も子とはよく云つた……」

と呟いて、

「神罰だ。見ろ。着物を汚しをつた。」

と、おのれも、その言の如くば、いさゝか神罰のとばつちりを受けた。白い袴の裾を氣にしながら、神主は、曲つた腰に後ろ手を組んだまゝ、靜かに立ち去つた。

瀬木権大夫の名を聞いて、神主は流石に感慨無量であつたらしく、それ以上小言も云はなかつた。私は、むしろ恥づかしく、泣きたいやうな氣持であつた。

当時、父権大夫は陸軍奉行を勤め、勘定奉行の小栗上野介と共に主戦派の頭目であつたが、勝、大久保等の恭順派の擡頭に連れ、追々に勢力を失ひ、つひに慶喜の爲に江戸を追はれた。この時、幕府海軍の創設者として名高い小栗は、愛用の大砲一門を引いて落ちたのが科になつて、朝敵の汚名を受け、つひに斬に遭つた。

父は全くの無腰となり、奇拔にも喇叭を吹きながら江戸を出た。その爲に瀬木は狂したと取沙汰され、追捕の手を免かれたのである。その後、父は駿河の西草深といふところに、僅かばかりの土地を求めて帰農した。明治政府からも頻りに招聘されたが、一切應じないで、全く世捨人の境涯にあつた。その替り收入の道は断たれ、ひどい落ぶれた生活で、家族は老いた父と母と、私の三人暮しであつたが、その日の暮しも立ち兼ねるやうな有様であつた。

かくして、瀬木権大夫の名は、いつしか世間から忘れられてしまつたのであるが、たま〳〵慶喜が西草深に邸宅を営む時に、又有名になつた。その時、附近に住むものは、士族と平民とを問はず、争つて土地の提供を申し出たのであるが、父は提供の申し出ではおろか、明け渡しすら拒んだ。

父の所有地といふのは、三百坪ばかりの空地同様の宅地で、草茫々と生ひ茂り、その中にぽつりと、家族三人の住むあばら屋が建てられてゐる。煙を立てれば辛うじて宅地と知れるやうな、荒れつくした地所であつた。

慶喜の新邸は、このむさくるしい土地が介在する爲に、工事計画に極めて不都合を來すに至つた。土地の有志は頻りに父を説得して、再三再四立ち退きを乞うたが、父は頑として應じなかつた。父の氣持は判らなくはないが、仮りにも昔の主公に対して、不遜のそしりは免れなかつた。

物に拘らぬ、寛厚そのものやうな慶喜は、瀬木の不遜をも意とせず、そのまゝ工事を進めたから、方一町にあまる堂々たる黒板塀の一部に、瀬木のあばら屋が凹字型に嵌め込まれる形となつた。

呉越同舟といふか、傲慢不遜の瀬木と、寛厚長者の慶喜が、軒を並べてすまひすることになり、慶喜の人柄のなつかしまれる半面に於て、瀬木権大夫は憎々しい悪役となつてカムバックした。今は誰一人権大夫を爪弾きしないものはないのだつた。爪弾きしながらも、僅かに同情を寄せてゐたのは、権大夫の配下にあつた旗本の一部で、何れも老い朽ちて敗残の余生を送つてゐる連中であつた。

右の神主も、恐らくその一人であつたのであらう。

「その着物を、川で洗つたらよからう。」

と、言残した言葉が、私には忘られない。

（未完）

不朽洞句帖

麻生路郎

お見舞と称し如己堂見にこられ

氣がつくと紙にブツブツ穴あけていた

筋肉労働せにやいかんと云われて居

老人は元祖にされて氣をよくし

愛人が雪の中の黒点となりぬ

大阪市　麻生葭乃

ニュールック着せる農家の夢は消え
なつかしの酒よベンチへ名を残し
柄にないお世辞は的をはづしたり
金貸してよその世帯へ口を入れ

大阪市　武部香林

のど自慢に出る氣か肥を汲みながら
吉報へ母の襷の置きどころ
吉報へ定期の切れたのも忘れ

兵庫縣　戸倉普天

銀行で勤めた腕の赤家計
松茸がもう生へますの雨となり
其機轉其意氣闇屋に惜しいなり

大阪市　浪玲之介

久しぶりモーニング着る不倖せ
腹の立つ日でもあろうか牛がすね
口答無理でなかつた明くる朝

奈良縣　上田翠光

金のない暮しのかくもとげ〳〵し
賣る花の束へも蝶が來て止り
跡かたもないとは風の暴れやう
業のうたかたに似し風の跡

平塚市　木村孤浪

半分はシャーブの芯は折れて減り
ガラス屋は割れるのなんぞ氣にもせず
ウェーターが居るので半端の皿も出來
汽車で飲む分は幹事が誤算をし
五十七濁水にすむ魚を知り

横浜市　福田山雨楼

図書館へ再勤

地下室の部屋今日からはもぐらもち
痩腕に構わず家賃倍になり
呉清源双葉山より軽く勝ち

池田市　戸田古方

人間が起きると猫も起きてくる
アベニューらしく灯のつく御堂筋
やけくそで飲んだも税のかゝる酒

東京都　前山北海

勝太郎ヅレスの舞台断られ
愛情も尊敬も割勘ときた
モンペ忘れてやれギャバジンだナイロンだ
罐詰の殼積み上げて自炊慣れ
惚れた方が譲つてやつと元のさや
二号さんに倹約説けば阿呆らしい
賣り食ひの簞笥夏物のみ残り

布哇　内藤草一郎

問ひ詰めりや笑うて指環廻す丈け
呼び水のつもりで百弗紙幣をやり
呑んじまへどうせ貯らぬ金なれば
里帰り他人の様な目に出会ひ
求婚を断り切れぬ借りの高

尼崎市　水谷鮎美

しらさぎより

達磨打つ男ひよろ〳〵醉ふて居り
サービスに包んでくれて髪匂ふ
義足コツ〳〵空の碧さにとけきれず
話好き便所へ行つたまゝ頓死

京都市　村松夢裡

対等に話して居るにへイへイへイ
税金の話酒など買ふてこい

大阪市　福田妄夢

屈辱を耐えるこめかみ脈を打ち
ぜんまいの象へ子の目と親の目と

岡山縣　浜田久米雄

霧深し夢を抱いて乙女來る
ただ僕が一人起きてる夜汽車の灯
花の束女根こそぎほしいなり
あの顔を檢察廳が連れに來る

大牟田　高田抱逸

社を辞めて趣味の釣さへ嫌になり
体育祭スシだけ父はたべに來る

布哇　市岡曉舟

ウクレ、を彈けばカナカはすぐ踊り
スピード化はいきなり接吻から始め

米子市　三鴨美笑

憎まれているを知つてゝ金を貯め
工面した金とは女しらず寢る
ばた〳〵と日はすぎ去りて金の利子
家計簿は体裁などを言つとれず

大阪市　市場浚食子

往診を断る女医も身重にて
父頑固母聾一人娘なる
事不利と見てボスの名を匂はせる
子もないし見込も無いし別れよう
働く氣出やへんがなと地方税
本棚へ衣食削つたのを並べ
轉向をしてもせんでも死は迫り
処女なんてあなたは古い要求ね

名古屋市　吉田水車

台風下写眞機持つて逃げ歩き

祝第五回國体(於名古屋)

御車の今は親しき御紋章

K君の結婚に

二人して踏む秋の土あたゝかし
表札の汚れを知るも十二月　兵庫縣　北川春巣

栄轉の荷に琴もあり嬉長さん
金さへあれば氣の利かぬ僕でなし
お祈りをする黒髪の長さかな
蚊帳吊つてこたつ入れたを云いふらし
藁布團かえた日病人チトはしやぎ　奈良縣　尾崎方正

白黒をすぐにきめたい低さでい
スマートであらせられるがちと弱い
若いなアとネクタイを覗いとき
神妙な顔で逢曳き表に出　姫路市　夷一笑

或る時は女の智慧をしりぞける
城下町リンタクで行くもらひ花
なりゆきにまかして置けば差押へ　岡山縣　大森風來子

別れの日キッスの多い映画を見
飯盒の水加減女あまへに來
儲つた算盤火鉢の上で入れ　鳥取市　中島鉄洲

中陰

亡き母の煙管を持てば詰り居ず
熊のゐと書きあり母の筆の跡

盗人來

脱糞は美事指紋は残さざる

秋の賦

名月え下界の唄に炭坑節
金融のついたとたんに痛が治り　出雲市　尾綠之助

柿右衛門窯にて

煙突のけむりうれしや柿右衛門　長崎の雨（二句）

信教に哀史があつて拜まされ
自動車で雨の長崎急ぐ旅
酔へば我が雄弁秋の八幡にて　若い実業家M君

儲からぬ話はよせと呑ますなり　大阪市　水谷竹荘

姑に良夫の浮氣打明ける
貞操を賣る氣借金苦にもせず
運不運恋にも敵があるを知り
恋盗む友をあはれと思ふのみ　下関市　弘津柳慶

野菜まで引継受けて引越し
マーケットで女給に会へば子を連れて
老ぬればうるさ型とはなりにけり　八代市　佐野卜占

買えば損買はねば淋し宝籤
アルバイト探す心も十二月　兵庫縣　小沢史葉

終電で「サノヨイ〳〵」と乘り合せ
アベックへリンタクわざと揺れて行き
キッスするとこまで見せる予告篇
戰後派同志流産したのを嬉しがり　兵庫縣　小西無鬼

アベックの共同募金避けて行き
同類と思われまいと追越した
名曲か知らねど夜業腹が立ち　大阪市　土井文蝶

差当りなんでもやる氣安定所
こんな世を子の行末を想いやり
働らいて取れと資本家折れ合はず

世が世ならなどと二疊の御あるじ
使はれる身でもはい〳〵言ふとれず　布施市　糸本醉月

天誅か税吏が酔つて川に落ち
市民税來てからサッパリ賣れまへん　尾崎市　小林文月

電車にて（三句）

車掌でも時によろめく事もあり
席をつめるに彼女は我に近づけり
顔あげればパーマの美人立ち居たり
トンボトンボ未亡人の子よく育ち　岡山縣　山分淑郎

骨張つた顔農民に生れつき
愛情が恋の全部でない女
この齢になるまで邪恋より知らず
誰彼となくつかまえて話したい
金のない恋など嫌といふ娘
平凡な女休で愛して來　大阪市　龜山晴峯

湯崎にて

ぬれタオル持つて湯崎のバーに居る
容疑者え默つてタバコつけてやり　高岡市　山根白星

オモチャとかにされて東京から帰り
ライヴァルの憎さはライカなんか提げ
地下足袋で出れば呼ばない赤い羽
恩のある家が吹雪にまだ見へる
辛うじて住む東京をうらやまれ
焼香に血は爭へぬうしろつき
上野署でワット泣き出すバスケット
樂譜くらいよめる二度目の嫁が來る
嘘でない証拠の帶をとけと言う
喫茶店くらいの恋が出來兼ねて

大阪市　渡辺孫拙

樂書もとんだ歴史をものがたり
おごられて義理のかへしが高くつき
喜多助と呼ばれて今日から番頭なり

大阪市　冨岡淡舟

日曜の子は雨だれを見つめて居
これしきの事を告訴とは悲し
失業者よ見習ひ給へモク拾ひ
應対も四十過ぎたる如才なさ

岸和田市　山野星登

平和平和只それだけでよし日本

奈良縣　飯降白香

いやな生徒が泡をとばして獅子吼する

奈良縣　西辻竹青

この社長落第生であつたとは
多弁もう家の秘密を打ち明し

山口縣　長野井蛙

税務署に鱈腹のまれ傘も貸し
食いかねる職場へ見切りまだつかず
顔捨てゝはく地下足袋に道があり

大阪市　上田春柳

漬物屋黄疸みたゐな手で包み
他人の子をほめりやうちの子もほめてくれ
早よう一起いと子がでぼちんをたゝきにき

布施市　森下愛論

ライバルは病氣そのまゝ死ねばよい
冗談に好きと言つたが緣になり
日記帳つぎたす程の恋をする
白足袋の主はもみ手でよく儲け

尼崎市　靜岡忠八

慰安会どじようすくいで認められ
ライターも傘も忘れた慰安会
酒ぐせを笑いながらもついでくれ

大阪市　松江梅里

押へられたまゝ冷藏庫夏を越し
今もなほ船場育ちの帶をしめ

岡山縣　直原七面山

さびれ行く町へ女も亦さびれ
澄せ〳〵何うせ貴女も恋の鳥
今日も亦有閑マダムのお伴して
貰ぐとは言はず用立て致します
又明日へ希望をかけた別れやう
此の膝に君を寢かせた日が恋し
諦めた恋へ女のするマツチ
キッスから思はぬ人の子を孕み
紅濃ゆく濃ゆく女の無智を知る
もろ〳〵の恋ありガード下に住み

岡山縣　黑田笑泉

柿一ツボツンとゆれる秋の空
出しや張の妻商賣の邪魔になり

宇部市　上林粗影

お悔に行くのに赤い羽根つけて
胃藥をこぼしながら蕗畑を眺め
追放解除コスモスの邸蔦の家
石坂ものが好き乳痛き年頃
菊の花醜女が抱けばなほ聖し

鳥取市　河村日満子

恋愛論後家が少女に言ひ負けた
あとゝりだからと叱つても吳れず
派手好みあるじは痩せてゐるならん
もう少し寢てゝと食事準備中

兵庫縣　田代尋四

締めたろと見たら卵を生んでゐた
こゝももるあすこも漏ると馬穴提げ
栄轉の山又山にちと恐れ

先輩の別宴

送別辞立つたが絶句又絶句

兵庫縣　家沢薺花

海を越すと聞けばつばめの案じられ
衞生講話処女の逃げ出す話も出
口べたを見込んで貸してくれた金
女事務休めば見合かときかれ
タワシ賣あれがれいらくした姿

滋賀縣　黄瀬美秋

産制にまでも姑干渉し
脳溢血のわけを女だけが知り
抓り合いして愛情を交換し
見てるから余計つまづくハイヒール
すねてみるだけで十九の恋ごころ

岡山縣　藤本満年

更年期内科外科歯科忙しい
鶏を飼つてオムレツハムエッグ
女中かと思ふ質素な嫁を伴れ
詰襟のまゝ停年に來てしまい
新聞で女優の夫教えられ
煙突の煙一すじ秋の空
子をあやす唄に困つたおけさ節
大時計ぶつきら棒な進みよう

熊本縣　西口如川

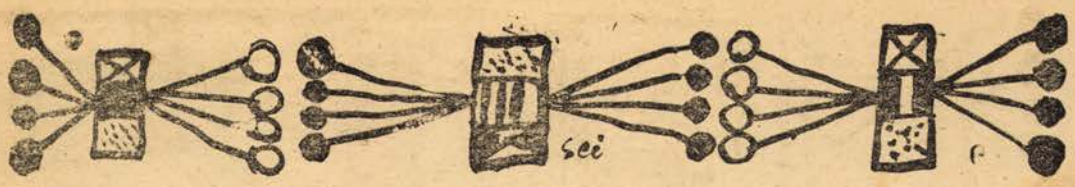
非公式だが肩書は能く光り
夢に見る恋は尼僧をいら立たせ
ミス代表自信に充ちた顔を出し

岡山縣　福島鉄兒

今日もまた頭を下げる靴をはき
農繁の郵便局は茶をすゝり
女房の三味に養われてゐます
月給を度外視してる呑みつぶり
腹の立つ女なれども逢いに行く

岡山縣　直原湖月

金だけが目あて二号をやめられず



青疊坐るに惜しい月がさし　岡山縣　黒田久米女

鶏卵も妻は予算の内に入れ　岡山市　藤本茶々

旗色が悪く同意の目を探し
頬杖の夫とりつくしまもなし
もう一つも一つ街角送られる
あゝ私は一豊の妻じやない
親は子はないのか煙突修理工　大阪市　塩浜一路

アルバムに子の成長をたんと貼り
ニュールック大根足を見逃がされ　京都市　谷内一草

ストリップどうのこうのと見に行く氣
秋の星一つ一つの淋しさよ
値切る事いつから妻の覚えしか
足音のまだ耳にあり二七日　大阪市　福本翩々

魔術師のように霧からやつてくる
せめてもの淋しき虚栄赤い羽根　池田市　太田木声

他人目には結構すぎる家に住み
娘を妻と間違えられる若さで居　兵庫縣　榎南夏六

大声が熱いかともう喧嘩腰
船世帯ネオン届かぬとこに碇め
税金のことも精しい話好き　大阪市　伊藤迷宮

晩年も苦労がつゞく白髪染
行末も知らず藥草咲き乱れ
折鞠課長になつた記念です
姦しいとは女湯の形容詞
よく見れば雑草にさへ運不運　兵庫縣　小畠無聖

万年床一人に惜しい庭の菊
処女でない心の際へつけこまれ
お早うが白く吐かれた寒い駅
晝風呂へ切腹するよに坐り込み
ハンカチを引き破つたる眞剣さ　岡山縣　高山朗笑

遊ぼうと思えば子供近よらず
腹が見えるよ柘榴かげんしな
皮肉なり酔うて帰れば針仕事　岡山縣　杉山一貫

あれも買えこれも買え娘の嫁き遅れ　岡山縣　横部牛歩

月の出の丸さを子供歌にする
濁酒(ドブ)だとは云わず晩酌呑んでます
出しやばりが燗のぬるさを云いにくる　岡山縣　服部十九平

之限りと言ふキツスして嫁に行き
百姓はせぬ條件で婿に行き
一滴も飲めぬを女軽蔑し
配給の様にキツスを奥れてやり　岡山縣　大森娯句樂

農繁期非番日寝るに氣を遣い　尼崎市　長谷川三司

安定所帰つてからの髭を剃り
退職金小店一つの智慧も出ず　西宮市　田辺由布

闇屋ギヨツそれはパンクの音なりき
見せる氣のライタへ女マツチ擦り
ほろ酔えば今世之介の飛田の灯
競馬には勝つて二号に取られて來
鼻の差で勝つて財布はスラれて居　大阪市　山中志乃布

奈良の鐘一突き突いて淋がり
予備隊に入れず子分に見離され　大分縣　桑原表情

台風來
警報のラヂオも切れて詰將棋
お妾と言われてくやしアルバイト　熊本縣　成瀬月仙

だつて〳〵とキツスされたい口でいふ
何人か殺した聽診器に頼り
わらわこそ姓は高峰名は秀子
なぐる父より泣く母へ甦へり　芦屋市　若林草右

絞り上げしぼられ同じ終電車
姑の眼は颱風の眼にも似て
終電を氣にして料理残して來　大阪市　足立春雄

別れる手フト女から教えられ
治る氣の藥瓶をば下げて去ぬ
七人目まだこの女産むつもり
夫婦など所詮路傍の石に似て
師の君の老の姿を背に見つけ
税務署だ偽札だとて子は遊ぶ

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
大阪・武田藥品工業株式會社
45錠入

旭町ジャングル

須崎豆秋

蚊柱と夜の女につきあたり
望郷のカスバよ月も酸えて出る
赤のれん女の太い脚が見え
旭町妻子忘れて呑むところ
関東煮くさい女に抱きつかれ
化けそうな女に鞄とられそう
口紅をつけた男にひつぱられ
もうろうとして輪タクが待つている
電柱へあやまつている酔つている
興太もんの目が光つてる夜の底
旭町ちよいな〳〵で夜が明ける

川柳への愛情

——漫談隨想——

藤本滿年

ラヂオの「とんち教室」はよく川柳が飛び出してくる。尻取り川柳にいたつては、毎回のように出てくるのである。眞面目な川柳家は、あれで川柳と呼ばれては川柳の權威が失墜する。あんなものは川柳ではないと憤慨をするのである。それは自然に「とんち教室」の生徒たちの耳にも入つたものとみえて、生徒中の生徒長崎拔天は、わざ〳〵ラヂオで弁明をしておつた。頓智教室の性格から見て、即席で、面白く答える関係で、本格的な川柳にはなつていないが、あの場合やむを得ないというような意味だつたと思う。「とんち教室」の川柳をつかまえて本氣で憤慨するほど野暮にもなり切れないが、川柳家の憤慨なるものに、弁明をする拔天もどうかと思われる。川柳を知るほどの人は、誰れだつて「とんち教室」の川柳を川柳とも思わないであろうし、川柳を知らない人が、川柳とはあれほどつまらないものかと思つてしまつたところで、大した惡影響はないと考える。もと〳〵川柳は川柳を知らない人から川柳を賞められようと思つているわけでもないだらうし、川柳を知らない人たちが川柳をどう思つたところで、一々それに神経を使うほどのこともないであらう。

「とんち教室」の川柳を聞いて、川柳を輕蔑した人が、何かの機会に正統な川柳に接し、川柳の文学的香氣に打たれるかも知れないし、その反対に、かつて正統川柳に接し、とうてい凡人に手のとどかぬ高嶺の花と諦めていたが、「とんち教室」の川柳を聞いて、川柳とはあんなにもユーモラスなものかと考えて、川柳に志をたてることになるかも知れない。

世はさま〴〵である。川柳を愛する自由もあれば、川柳を愛さぬ自由もある。

それでよいのではないかと思う。だから、「とんち教室」の川柳を川柳でないと見るのも自由であるし、あれも川柳なりと思うのも自由であらう。しかし批判の自由ということもあるから、如何なる批判を加えることも自由であるが、それほどムキになる問題でもないことを、がみ〳〵いゝすぎては、世の中が騒々しくて住みにくゝなる。

川柳は住みよい社会になつてこそ、意義もあるが、川柳が理屈つぽく、とげ〳〵したものでは、川柳を愛するものも少くなつて行くであろう。私は或る川柳の雜誌で丈高い男が女を抱いて殘燈がまたゝいた

眠らんよ、生きてあらんよりヴ
アンプの下袴(モスリ)に
風が死んで雪が死んで夜のみち
のく

という三句を見つけてびつくりしてしまつた。川柳とはむつかしいもの、深いものとはいわれているが、こうも長いものとは知らなかつた。こんなものは、詩川柳というのだそうである。この作家は、頑強に川柳詩論を說え、ついに散

文詩と川柳の合いの子が出來てしまつたようである。そんないゝ方をすれば大変なお叱りをうけるかも知れないが不勉强な私にとつては、このような川柳はむつかしすぎて、むしろ「とんち教室」の川柳の稚氣を愛したくなるのである。とかく大家になると、型を破りたくもなるのであろうが、型を破るにも限度があつて、人間の社会に馬の生活や、牛の生活をそのまゝ持つてきては無理ができる。たとえ、川柳が詩であるとしても、又詩を縱に並べて、川柳と思え、といわれてもうけとりかねる。

文学は或る意味で時代の記錄ともいえる。いまの時代が、思想的な混乱期であるから、文学の上でも複雜怪奇なる形態が現われ出するというのであれば何をかいわんやである。

川柳は軽る味、穿ち、おかし味の三要素を持つがゆえに愛されている。その反面その故に川柳へ入り切れない人もあるにちがいない。平言俗語の川柳に句品がないと見て韻文の俳句を愛し、ユーモアがないために俳句を捨てて川柳に入る人もあるだろう。文学のジャンルとして、川柳、俳句、短歌、その他、それぞれの特長を持つている。それを殊更、散文詩的川柳や、俳句的川柳を押しつけて、新しい川柳とか、句品のある川柳と思いあがつているのは浅ましき限りである。詩は詩人、俳句は俳人、短歌は歌人、それ〴〵の世界で、幸福に暮せばよいことであつて、川柳の世界へ、全く別の世界の形式を持つて來て、がさがさかきまぜるのは、正しい意味の改革ではなくて、どこか暴力革命を思わせるニュアンスがある。

「とんち教室」の川柳と妥協したり、暴力革命的川柳をうけ容れなかつたり、まことに憶病な、弱虫といわれるかも知れないが、平和な川柳を愛するものは、幼稚な「とんち教室」を大人氣なくも、けなしつける必要を認めないとともに、あくまでも暴力革命を否定するのである。

川柳とは文学のうちで一番平和的な文学だと思つている。そして極めて自然な表現法は、大衆的な文学として、民衆の生活の中に根深く入り込む文学であると信じている。川柳はいまや大衆の中にぐん〴〵入り込みつゝある。川柳は目下発展普及の途上にあるといえるのである。このような過渡期にあつては、大衆の眼に川柳の正体をつかみにくいほど、難解な論理や、複雜怪奇な破調を押しつけて、混迷に陷いれてはならないのである。

川柳と大衆を結びつけるには、時事吟が一番手っ取り早い。社会の動き、世界の動向に対しては極めて大衆は敏感である。

社会の動きということは生活に直接結びつくからである。毎号の「川柳雜誌」を見て、必らず税金と税務署に関する句を見ない時はない。税金と生活はそれほど大衆に関心の深い問題なのである。

税務署の通達決闘狀に見え　生々庵

読喰をしているにでかい市民税　沒食子

心臓の强さを税務署と競べて來　醉月

税金を苦にしておやじ臥ています　豆秋

税務署の偽促妻にだまつとき　一笑

重税に胃酸カリをふと思い　忠八

税務署は笑つてばかりとりあわす　笑泉

といつた調子である。時事吟は「いのち」が短い。時代とともに消え去つてしまうものではあるが、その時代の人情風俗を知る記錄的な文学といえぬこともない。古川柳にしても時事吟は非常に多く、今日の生活では全く通用しない境地のものが大部分ではあるが、江戸時代の市民生活を偲ぶ短詩文学としてまた掬すべき味合いを持つているのである。私は川柳のうちで、時事吟を特別推賞するというのではない。川柳大衆化に時事吟の手っ取り早さをいうのである。

ラヂオの「とんち教室」の川柳が川柳家たちに非難されている割合に、川柳を知らぬ大衆から愛されるゆえんも、時事を諷刺する時事吟が多いからである。アサヒ・グラフの句尾首川柳なども、寢言の余りのようないい廻しではあるが、時事吟なるが故に、やはり読者をもつているのである。

川柳とは全く別の世界ではあるが、新聞の「天声人語」や「硯滴」が多く読者をもつているのも、時事短評としてのアイロニーがきいているからである。十七音字の川柳の中に、時事を詠みこむことは、むつかしくもあり、句の〃いのち〃も短いとすれば、時事吟に精力を削くことは可成り無駄なようでもあるが、時事吟によつて、川柳の大衆化が実現すれば、まるで無駄なことでもない。

川柳は、自分の詩情を詠みあげるのが目的で、川柳大衆化などは余計なお節介だと思う人もあるだろう。しかし私は日記さえ錄々つけぬ横着者であるが、日記代りに川柳を書きつゞけて行くのも一つの樂しみである。時事吟即ち生活句であり、人事句ともなる。また樂しからずやである。私は川柳は樂しいもの、親しめるもの、そして愛すべきもの、川柳を呼吸する生活をしたい念願から、日記風川柳を書きつゞけている。人にもすゝめたいと思つている。以下私の日記から——

世は金づまり、花に浮かれて修学旅行をやめてくれ

—読者の投書（私は新聞社に勤めているのでよく投書がある）

かぢられるスネに淋しい金づまり

女工さんを後樂園で誘拐した犯人捕る。うぬぼれは誘拐され易し

触れば散る風情でも街をゆく

死刑にしてくれと、無期が不服で控訴した男がある。

満員の地獄へ無理にゆきたがり

倉敷の健脚娘賊を捕う

若い娘に捕つて見たい賊でありアメリカの中古衣の賣行が悪い高いから

魅力なきにあられども金づまり

職があるのに働かず失業保險で寢て暮す、さても困つた失業者

失業へ若葉青葉の美しく

同舟近詠

金沢市　安川久留美

本名を呼びじまいなる北枕
骨壺に声無し冬の蠅とまる
俯甲斐なき父を怨まず子のいまわ

松山市　前田伍健

眞実の事をあつさり云うも歳
ミス何々誇りが鼻に目に口に
街録のマイクえノロケ申立て

大阪市　橋本緑雨

資産税逃げ出そうかなと思い
口紅の色を男に見せにくる
樂しさがない男にて御座候
もうかつたところで金は社のものよ
年始にはブドー酒組が來ると言ふ

清水市　富士野鞍馬

國会ほ芝居のように見下され
パチンコで喰える話もきゝはきゝ
三保の松外國船にしたしまれ
スタンドに母も來てゐる打撃振
運のいゝことに上役二人死に
下駄の脱ぎようも藤間へいつてから
妻の金息子の金とありあまり

近作柳樽

わが妻の靈に捧ぐ
昭和十八年一月十三日結婚

台所今日から主婦の割烹着　大阪市草々
十九年二月十日長男誕生

旗立てて欲しい男の子が生まれ　同
二十年一月十三日出征

見送つた時の軍歌で子を寢かせ　同
結婚生活七年

味噌汁の上手な妻と世帯なれ　同
男湯の方が空いてる抱かされる　同
出世せぬ良人でも良い生きている　同
配給で醉はせたげたい酌をする　同
父の帶借りて市場へ子を背負ふて　同
煙る雨あの日の妻の声がする　同
腹の立つ奴だが死ねばチト淋し　金沢市陽々
つながれて居ても猛犬よせ付けづ　同
無造作に捨ててた恋が惜しくなり　同
アコガレは勉強でなくユニフォーム　同
既製品のように子供は並べられ　同
美辞麗句揃へ弔辞はもう終り　同
永患い少し無茶でもして見度く　同
還暦へひとり歩きの出來ぬ子等　貝塚市千舟
重患の口の達者なのにあきれ　同
入院を早めてもらふ袖の下　同
税務署に勤めて醉へば疑がはれ　同
新婚のどこへ行くにもカメラ提げ　同
球場が近くに出來てから怠け　同
仕立物届ける家の菊盛り　同
芝居ではあらうが家出ほつとけず　廣島縣芳泉

謹賀新春
（柳人交歡のページ）

川雜東京支部

川村好郎
宮田不二
植田千束
田ひろし
石居高志
武田登志
加藤守夫
田中稻水
清水一郎
福田雨楼
客員

川柳雜誌社
岡山支部
岡山市下出石町六二
——不朽洞会員——

浜田久米雄
鈴木九坡
大森風來子
山分淑郎
大森娯句樂
藤本滿年
藤本茶々

川雜下関支部
下関市上新地町
小門鉄道公舎半休門

関鉄同人
阪田良坊
三田周平
津島眞坊
藤田素人
岡藤市
畠山田辺
石川侃流
加藤司楼
多田ほなみ
西田不川
今岡今生
内田茶人
住沢紫蓮
大塩哲志
多田海朗

岩崎勇記
中村九呂平
國弘半休門

市内同人
藤井米三翁
高橋かうたる
弘津柳慶
櫻川不水
望月白陽子
客員藤井赤とん坊
〃久芳木陽子

雷へ十八貫が蚊帳をつり　同
二号でもいゝとは女哀れなり　同
綻びへも一人女房持ちんさい　同
許婚嫌ひ抜かれた意地があり　同
愛されて居れば女は太平な　同
ハゲ位ひ嫁きます別荘自家用車　吳市史球
心澄む人らし声のうるわしく　同
アイラヴュー胸にしまってカビさせた　同
手を出すな社長のアレと教へられ　同
税務署に結婚一年のばされる　同
貞操も怪しまれてる儲け様布　哇純香
外面は何処までも女秘書であり　同
まんまるい月よと妻に教へられ　同
うう〜はあの娘もほんまの父を知り　同
三十を過ぎて夜学に又通ひ　同
倦怠期とかく誤解も多すぎる　神戸市梧櫓
仲人が落していつた赤い羽根　同
善人ですと云わん許りの赤い羽根　同
子を叱りなにやら苦い氣が残り　同
いじましい赤い羽根まで拾てゆき　同
名月を女はみんな寝てしまひ　八代市斗四翁
師範での同窓生が紙芝居　同
引越の度に疊の数が減る　同
飴賣が將校だつた口を割り　同
物干に來てパンツだけ抜いてゆく　同
もう人に心配される歳になり　岡山縣苑女
故郷へ帰る
ふるさとの土へはだしになつてみる　同
母さまの小言うるさく暖かし　同
友に逢いて
はや二人になつたのと抱かされる　同
焼酎へ話まとまり早じまい　廣島縣季贊
共稼ぎ夫が樂な職にゐる　同
秋の風娘そろ〳〵ズボンはく　同
霜の朝まだサンダルの娘が通る　同
お散歩はいかゞコスモス揺れている　曉明
畜生でさえと教えるエチケット　同
赤い羽根つけて議長の席に就き　同
行事板松茸狩は赤で書き　同
どうですと訪へば今年も寝正月　高知縣十四郎
二度目の賀狀書くベッドなり　同
集金が來そうに思う日の財布　同
喀血十二回目
死も又樂しからずやこの世相　同
一点が外れはせぬかストリップ　鳴門市五厘棒
双親がなくてストリップショウに出る　同
居酒屋の女に細い雨が降り　同
死んだ方がましか早出の靴をはき　同
かくれ田が水利でばれる秋夜長　出雲市へとち
稗実る生あるものゝ逞しさ　同
新税講習亦ためいきを新にす　同
予備隊は通らず嫁は來て吳れず　同
無い者は強し税務署くやしがり　東京都蛙声
履歴書の字の枯れかなし四十の手　同
せめて子がせめて孫がと古稀を過ぎ　同
老ひぬれば小言の多き酒をのみ　同
待たされた役場で印が一つ要り　愛知縣吐平
牛鍋を囲み浮氣をした話　同
失恋の女の度胸怖くなり　同
学歴を一先づ隠す安定所　同
水加減してある釜を任せられ　佐賀縣えいを
藏書家と言はれ燈下へ親めず　同
或る日の陸上競技場にて、
タックルを外し独走の眉を上げ　同
バトン尚渡し切れずに縺れ駈け　同
見合ではメガネをかけて居なかつた　貝塚市不精

川雑出雲支部（出雲市）

島根縣出雲市高松

尼絲之助　小倉へとち
沢田吐泉　曾田大朗
竹原雲平　野村岬月
原独仙　原峰雲
森山壯　和田柳作
（五十音順）

川雑 岡山縣廳支部（いろは順）

服部十九平
直原七面山
岡本中山子
黒住九六
増山案山子
小山吉備平
後藤無聊
三宅紫郎
外一同

川柳日の丸会

鳥取市富安町三八〇
日の丸自動車鳥取工場
電話 鳥取一五三三番

川柳後援會

会長 上山専一
鳥取市東品治町五二番地
日の丸自動車株式会社内
電話 鳥取自一二三〇番
至一二三三番

鳥ケ辻川柳会

市場沒食子　池戸桃村
井上明欣　橋本幸男
西辻竹青　西川惠風
若林草右　上林平三
吉田斜水　田中耕人
津村神峰　中谷葉栄子
牛田晴夫　尾崎方正
太田良子　山本新陽
小沢史葉　足立春雄
酒井純三郎　水谷竹荘
森下愛論
（イロハ順）

川柳雑誌社 備前支部

川柳雑誌社篠山支部

兵庫縣篠山町

家沢蕣花
田代尋四
小畠無聖
小西無鬼
（イロハ順）

父も又酒好きでしたと妻の酌　同
カストリへ今日はあぶれた夜の女　同
買出しのイモをかついだ此のコース　同
斗酒辞せぬのが眞先に討死にし　熊本縣梢風
長年の番台無表情で居る　同
もう一度見たい愚妻の十八九　同
写眞機は待たせた割にあつけなし　同
もう玄人ですよミシンで稼ぐ氣の　石川縣光郎
バイブルを形見に呉れる友が逝き　同

柳友吉祥氏の死

訪うた家に君の句のありなつかしむ　同
慾張りと言はれて二号持て居た　大牟田風浪
呼吸絶えし兒へこれまでの頬を寄せ　同
酔どれが人の流れをよどませる　同
子を写すカメラが慾しいなと思ひ　倉敷市千代男
貨車を呑む航送船は自若たり　同
百姓の子が百姓を捨てたがり　同
新聞に出た事もあるあの娘　尼崎市ちか子
抱いた子に自轉車のベル触わらせる　同
抱いた子の頬に御飯が付いて居る　同
長男は百姓向に生れつき　愛媛縣籔明
着物には若さの残る未亡人　同
借金をウンと作つて死にけり　同
ブツツリとラヂオをきれば秋の夜　愛媛縣旭童
邦樂も亦よし秋の夜なれば　同
一人前に見てくれたのは市民税　同
好きな道どれ〳〵と見る子の將棋　宇治山田市卯門
病床の誰か故郷を思はざる　同
急停車稲刈の手をちと休め　同
家中が出し合うて買う三輪車　高知市一徹郎
運動会我子が出たが尻を行く　同
薄幸な娘のやうに秋櫻　同
歳とつた証拠滅多に叱らない　今治市文庫
降り出して本屋へ行けば疑はれ　同
成金の書棚へ紙魚がのさばつて　同
社を辞めてからも社宅にがんばる氣堺市太路
寢台で行き大臣に逢ふ五分　同
校長を辞めて教委も落選し　同
木賃宿髪の毛が出る飯であり　大阪府きはち
今月もくじは当らぬものと知り　同
台風の前から雨は既に漏り　同
秋空を二つに切つてホームラン　廣島縣愛鳩
儲りませんなどと二号もおいてみる　同
金つまり戰後景氣がなつかしく　同
いつわりの赤いくちびる赤い爪　宮崎市卯之助
徴集へ税吏の腕の見せ所　同
分納でよいと徴集腰が折れ　同
古手帳肉五〇錢ネギ二錢　出雲市雲平
薬にも毒にもならず八十二　同
人並に僕も解除と元少尉　同
儲け高大学出をばをかしがり　和歌山桑南
トラックがはしやいで通る水溜り　同
なれ鮨の仕方嫁まだ委されず　同
坊さんがかしこまつてる三等車　三原市正一
二日酔こしやくな妓を思ひ出し　同
税務吏にマダムは別な媚を持ち　同
義足引ずつて他人の中へ生き　横浜市智水
幸福と言ふやネオンのまたゝきを　同
幸福かしら混血兒胸に抱き　同
現実は斜陽夫人に冷た過ぎ　守口市乃平
算盤が合へばます〳〵赤字なり　同
横顔がとても冷たい女秘書　同

東夢氏納骨の日に

父の死を教えたくない子が二人　東京都高志
毒舌をふと懐しむ二一七日　同
人妻とはじめて知つた熱海の夜　同

謹賀新春

（柳人突欲のページ）

武部香林
武部若菜
大阪市東淀川区三津屋北通四ノ二九

戸倉普天
兵庫縣氷上郡沼貫村小野

橋本綠雨
大阪市東住吉区平野西之町八三
電話天王寺㊲一一六七番

須崎豆秋
大阪市阿倍野区旭町三丁目一四

土井文蝶
大阪市西成区松通九丁目二十二番地

小兒科沢田医院
沢田四郎作
大阪市西成区玉出本通一丁目一三

木下幽王
大阪市阿倍野区帝塚山西一丁目十一番地
勤務先 ダイヨ産業株式会社
電話新町㊸一七〇七番

兵庫縣武庫郡本庄村深江二六三ノ一　上坂茂
西宮市今津綱引町八三　田辺由布
尼崎市西宇口開一八一　水谷鮎美
尼崎市昭和通六ノ二一六　長谷川三司
大阪市西淀川区野里町一二三八ノ六　大西柳堂
大阪府豊能郡箕面町平尾　荒木哲水

申告の控を残す父となり　石川縣義久
登記所で印の掃除をしてもろた　同
墨の香のほのかに元朝明けかゝり　同
再婚の話しに膝の兒はねむり　山口縣鳥石
そのかみの恋はだまつてすれ違い　同
氣の強い母親類をあてにせず　同
新築に電蓄運ぶ車みえ　米子市雄々
朝鮮語放送みんな寐てしまい　同
欠伸出る程花束を抱いて待ち　同
秋深く隣りもサンマ燒くけむり　東京都臥竜亭
鳥肌の立つのも見えたかぶりつき　同
愛情をドルで計つてさようなら　同
アルバイト明日のプランロホールの灯　米子市豪夫
暴力團母の愛情まだ知らず　同
客去つて姉も炬燵に足を出し　同
パトロンへマダム算盤すぐ彈き　長野縣柳兒
留守を引受けて病人いゝ氣嫌　同
稅務署ええうるさく出向き顏が賣れ　同
煩悩を呼び起させて見舞去に　豐中市直郎
宿命の肉体青い空を避け　同
再婚へ墓は冷たく忘れられ　同
愛称で呼ばれ老妻醉いを知り　大阪市志津
手鍋さげても好いとアブレは云はなり　同
あの人の方が好いのと拗ねに拗ね　同
どつちみち損の行かない署名です　愛媛縣曉童
ぬすくりつけた後の興ざめ　同
赤字ちゞめる妻の筆算　同
雜音をきかないことにして眠る　大阪市葉光
商賣のコツに大阪弁習ふ　同
頑固を捨てゝ何が残るか淋しいね　同
子を一人まうけたゞけの年が暮れ　岡山市四案
またあゝもこうもしたいの年が來る　同
ともかくも円う坐つてとそをくむ　同

文化人と云う顏信号無視し行く　貝塚市梵鐘
落し物探してるよな蟻もあり　同
あほかいな二人で居つてキスもせず　同
先妻に似た甘え方して淋し　石川縣夢晴
理解した父も昔はそうだつた　同
フラッシュへ天皇帽子あげたまゝ　同
金もなくなり酒もなくなり冬の宿　德島縣志津雄
狹いからゴビの沙漠に出てみたし　同
文化國家の三時へいもがむせ上り　兵庫縣紅山
生活のつかれ見せまい髭をそり　同
お祭へこんなに母の手で育ち　愛媛縣孤峰
草を刈る蜂も蛙ものいてくれ　同
帰省して來た娘の趣味が氣に入らず　熊本縣鶴堂
横好きと云はれ多趣味に甘んじる　同
何時の間に嫁つたかしらぬ荷を運び　大阪市独実
目的はたゞあの山を越すだけさ　同
遠足はへそくりの服着せてやり　大阪市葉茱子
情味ある秋アベックの多いこと　同
古写眞あゝ誰れも亡し彼もなし　愛知縣竹坊
向うの舟ばつかり沙魚よく釣れて　同
急病を知らず二号は待ちこがれ　岡山縣美能留
落葉掃く二号センチな顏をして　同
理由など無いと新妻泣き止まず　岡山市迷窓
狹くとも生き拔く二人窓を拭き　同
採用の通知ゴム印有難く　米子市風塵
出産の妻早退を眼で賴み　同
三枚目偶にはキスがして見たし　大阪市樂天
産制のことなら母より経驗者　同
切れる氣か今宵の恋の冷かさ　岡山市三葉
親達の虚栄か今日の七五三　同
軍神の写眞土藏にほつとかれ　岡山縣奇童
おしやべりの妻に外交まかせとき　同

川雜弓削支部
弓削川柳社
不朽洞会員
丸山弓削平
直原七面山
黑田笑泉
福島鉄兒
直原湖月
黑田久米女
高山朗笑
杉山一貫
家本富至
横部牛歩
服部十九平
○
葛原水甫

川雜岡大支部一同
岡山市岡一六四
岡山大学医学部

南海電氣鉄道株式會社
川柳部一同

大阪市交通局川柳会
芳人　淡舟　正則
小柳子　胡蝶　双虎
風路　水月　蝸牛
翠芳　和樽　孫拙

体溫川柳会
貝塚市名越千石莊

南区医師会
川柳同好會
安岡珊枝郎
長谷川迷路
南捨彈
黑木一
牟田瑞
河村無名林
木村哲
中島生々庵
田中烏
藤原虚水耕

白壁へ坊やの育つ線があり　熊本縣昇
箱入の娘へ戰後派はねたましい　同
うどん屋へ今日の寒さを借りておき　岡山縣敬
逢引が寒さに負けて場所をかえ　同
セックスを語る或る日の銀座裏　長崎市夢
白牌は去りし女の肌のいろ　同
一現の約束指切りして帰り　岡山市忠
トンネルを出る度川の廣くなり　同
金婚式同じ白髪の友が來る　熊本市安
逢ひにゆくパラソル派手な音であき　同
十二月貸してる方があわて出し　岡山縣艸
もう死ぬる歳を炬燵によう居らず　同
デパートの買つたところへ忘れて來　鳥取市芳
給料は下げぬ左遷と承知する　同
月末の樂しみクジが二枚あり　奥　市梅
明日は発つ氣持ちが恋を大胆に　同
ユーモアで喧嘩も裁くいゝ車掌　大阪市柳
差押へ引越しのやう持つて去に　同
ふところ手時計を五分程すすめ　岡山縣夜
告口をして小姑氣が晴れる　同
理窟だけたれて会合抜けて居る　奥　市しずを
声色を変えてどなつた町のポリ　同
完納後笑ひ方まで変るなり　京都市狂
ぬの列に僕だけ男宝塚　同
火葬場の経営難が笑わせる　米子市鱒
どの看板が今上映か聞いて見る　同
配膳を見計つて坊主経を止め　萩　市穂
だだこねた電車も買つて佛壇に　同
心ではうるさくなつた居候　布施市柏
ポリとスリ思わぬとこでめぐり合い　同
編物集ほどに毛糸の出廻らず　熊本縣元
月折鶴の鏡かけなどして嫁ぎ　同
氣の抜けたような汽笛で日が暮れる　愛媛縣古　峰
貢　死ぬつもりで遊んだはてに氣がかわり　同
水準が低く野球の強い学校　貝塚市無　骨
路仁術と云はれる医者の所得税　同
鏡かけほのかに妻の香を求め　松山市晴　晴
美　肩書がふえて敵が多くなり　同
見違える様に女給は出勤し　大阪市惠　風
六三制野球ばかりが強くなり　大阪市幸　男
稲刈の老夫婦あり競輪嬢　愛知縣剣　坊
彦　洋館に改築すれど客はへり　愛知縣北　雷
骨　芽の生る時期には山がほしくなり　岡山縣至　孝
坐つたか坐りましたと窓をあけ　米子市水　鏡
道　日暮れて同じ思ひの未亡人　熊本縣実　信
本降りになつてよう〳〵祭りすみ　愛知縣寛太郎
香　鼻の汗看護婦残りの飴を出し　米子市しげる
個定資産税終に旧家も旅館なり　愛知縣雨　蓮
亭　百万円の夢洋館も建てる夢　愛知縣久　平
潮　附錄料理たゝ読む丈の暮し向　下関市侃　流
投賞がステッキの先で値切られる　岡山縣夢　成
貯金する手で銀行のドアを開け　岡山縣日の出
行き詰る迄は信心せぬ氣なり　貝塚市初奈里
アドバルン見えて都へついた汽車　岡山縣麗　甫
風　種三改メ　滋賀縣紅　月
高砂の浦を石炭船通り　岡山縣露　外
のど自慢村一番が鉦一つ　岡山縣露　外
三　月よりの使者よ私は夜の華　山口縣秀　峰
女店員の顔で賣れてる見切品　姫路市乃里夫
波　生返事それもそのはずレター読む　廣島縣季　贅
女教師のヒスを生徒はなめて居り　岡山縣麦　秋
葉　故郷を問はれ原爆地と答へ　廣島縣スミ子
増産意慾あゝそれなのに牛が病み　岡山縣百　郎
金出來て日頃の思想何処へやら　大阪市秀　雄

謹賀新春
（柳人交歓のページ）

川柳雜誌社八代支部
佐野卜占
八代市浜成町六一四

長野井蛙
山口縣小郡

川雜大和支部
上田翠光
奈良縣宇陀郡
三本松村向淵

日の丸川柳会
河村日滿子
岡嶋芳道
田中遊星
羽野朱雀

森口太郎
大阪市外藤井寺町
字岡三九
電話藤井寺六四番

川柳雜誌社ハワイ支部
ウイロー社
同人一同

リレー隨筆

くるまたんぎ

東野大八

川柳では東野大八だが、軍義男というのが私の本名である。変つた名前ですれ、とよく人様から顔を見られて感心されるのだが、当の私にとつては氣にいつた名前である。第一氣にいらないといつたところで今更どうにもなるものではない。

中野重治の古い小説に「空想家とシナリオ」というのがある。その主人公の名前が軍善六というのだが、ご本人はこの名前に大いにこだわつている。その原因というのが、軍善七という非人頭がむかし江戸に実在したことによる。もしかしたら俺はその非人の末孫ではないのか、この氣がかりな主人公の嘆きの氣持は結構私にも通じ隨分イヤな氣分になつたものだが、親父は「善七にあらず、軍丹波守十六代目の末えいだよ、ワツハツハ……」と笑いとばしてすましていた。

後にわかつたことだが、この軍姓についてこんな話がある。私の親父というのは大阪の船場に生れた。家は袋物問屋でいわば船場のボンボンなんだが、この親父が北野中学に在学中女が出來た。ところがその相手が堂島のすし屋の女中で年が十以上もちがう。結局玉造の番頭の家にあづけられたが、ほかの遊びもすぎて義絶となつた。さうなれば親から貰つた名前なんぞはオカシクツテといつた調子か、千日前の八卦見にたのんで書いて貰つたのが開運大吉の「軍」の文字だつたのださうだ。

現在のおふくろもまたおふくろで「第一名前が氣に入りました」と嫁になつたのださうだ。ちなみに親父も五黄のトラならおふくろもトラ。そんないわれをきいて「親父話せる」といつた不肖の息子、つまり私もかくいうトラ歳なのだから世話はない。後年私はよくこの親父と意見の衝突を來したものだが、その場合「そんなにいうなら勘当してくれ、今度は軍なんてケチな名前はやめて威勢よく戰車か、飛行機とでも改名した る」と大見得を切つたものである。

筆者近影

東野という名は大陸でつけた。勤め先の社長が「君の名はシナ語でいえば草津節の端つこみたいにチヨイナ、チヨイナという発音になるから、川柳名で通して東野にしろ」といつたことから社命もだし難くこれを使用した。爾來十年の大陸生活に公私ともにこれで通したので、ガラクタ動員で軍隊に入つた当初は名前を呼ばれてもよくしらん顔をしていた。

その軍隊にいるときだつたが、洛陽攻略の或日、戰友が「オイ、お前の兄貴が裏庭にいるぜ」というので案内して貰うと、一人の便衣隊員が「軍振東」という名札をつけて立木に縛られていた。

事を振つたらヒゲが生えるんだネ、と当分冷やかされたものだが、軍と東の字面を思いくらべまつたくの古川柳好みの事実にあきれたり感心したりした。中國にも朝鮮にも軍という姓が多い。俺の名はアジア的だと苦笑したものの、親父の山ツ氣がそんな氣宇壯大に思い及ばないものだけにこれは自慢にもならない。

やがて戰傷で片腕になつて私は十六年ぶりで両親に再会した。トラ歳の母は「軍がカタ輪になつたら使いものにならんと」シヤレツ氣まじりにいつて涙をこぼした。親父は親父で、軍義男様方東野大八という手紙を見て「大八軍を二つにきるからそんなことになる」と索然たる顔つきだつた。

片輪軍はいぜんとして健在だが、それは中國の一輪車はどの値打しかない、しかも出來た子供に乳母車も買えぬ暮しは、今もつて完全な火の車である。

次回は**石原青龍**氏。

一九五一年の新春を賀し奉る

（柳人欽交のジーベ）

川柳雜誌社

麻生路郎

麻生葭乃

中島生々庵

大阪市南区鰻谷仲之町二〇

電話南三九八四番

木村孤浪

平塚市馬入二九〇九

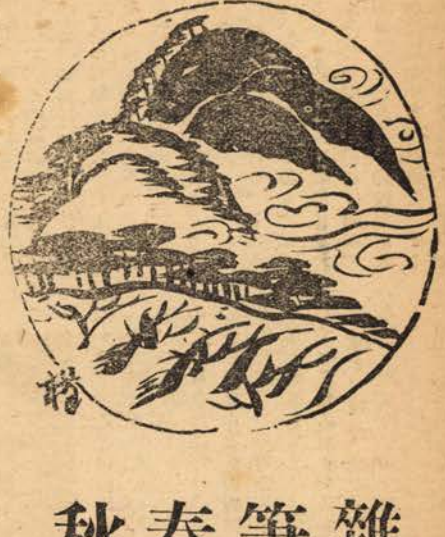
高鷲亜鈍

大西野介

亀山晴峯

特殊紙器工業株式会社

大阪市阿倍野区晴明通一



雜筆春秋

風流紙芝居

前田伍健

今日は朝から閑だ温泉にでも行こうかとフト新聞を見ると「縣下紙芝居業者講習会」の記事が眼についた。紙芝居、街頭青空弁者の紙芝居これは面白そうだと思いつき、この大会場え受付をゴマかして、まぎれ入場した。二百名近くの業者が、ワヤ〳〵ガヤ〳〵やつておる。やがてそれが鎭まると文部省派遣の佐木氏が演壇に出て型通りのお話あり次で、一流紙芝居屋氏の模範演技が始まる、藝題は風流蜀山人である。説く程にその話術のうまさ、良否説明の使い分け、又「紙芝居喧嘩を分けてから初め」「呼びに來た母も見て居る紙芝居」と川柳を入れる、全くうまいもので聽き入る同業者連も思はず溜息をつき、あゝ云う人に一週間でいゝ師仕して研究したら、PTAから叱られる事など絶対にあるまいと云う有様であつた。この講習で私が会得した事はいろいろあつたが、その内で重なるものを数えると、左の通りになるようだ。

一、紙芝居は日本独特のもので英訳も「カミシバイ」である。紙芝居の起りは昔からある絵巻物、人形、幻灯より轉化したもので、街頭に出たのは昭和の初め頃で例の戦争時代に最高潮に成り、いろいろ利用され、戦後一寸寂びれたが近頃又擡頭、東京でも二三千人の同業者があるそうな。

一、発言はつきり　一、早口は駄目　一、作るな氣取るな筋を呑み込め　一、地声で素直に

それから時勢を知れ、子供の眼を見よなどであつた。一流技能者に云はすと有名な浪曲の某など七色の声を出す、あれは浪曲でなく「声帶模写」であり、本当の浪曲でないと云い。家鴨の絞められ声、三十六峰の映画説明式、先生の教諭口調、社交調の上品ぶりなど皆な駄目であると一々実演して、成程と思はせた。「平明」で行けと勧めた。「あせるな」「画題の意をよく知る事」とも誡めた。何んだか川柳の講演にも似た点があると私は聽き入つた。蜀山人の画面で風呂に入り出るに出られぬ表現を、火が炎えている、煙が出て居る。窓の外には櫻の花が咲いて居るなどは普通一般に云いたがる説明だがそれはイケナイ、「お湯が熱くなつた、出たら風邪ひくし入つてはおれずハテ困つた」これでよろしい、摑み所を摑む修養を研究しなさいと教えた。益々川柳に似て居る。紙芝居の持ち味を忘れて、他の眞似をする。面白さを突出し過ぎて失敗する。力み過ぎて硬くなる、云い流しで味が無い、達者であるが現代感覚に遠いなど愈よ以て川柳に似て居ると思つた。それから座談会に移り「霊法の言論自由と紙芝居」を振り廻すと「交通取締法と衞生取締法」で左様は行かぬとカチ合う。「言う權利自由があれば拒否する權利と自由もある」と渡り合う。子供の代理は父兄であり「PTA」である……つまり「よいものを選び教養を積む結論におちつき協会、製作連盟、作画協会、民間檢閲、視聽覚委員会の緊張緊褌に成つてけりが付き、モグリの縄張り荒し、脱線画劇で天眞ランマン子世界をカク乱する。業者、短日永日の営業方法、亭々と私塾の知らぬ世界の業界裏表に目を丸くした。

尙、私はこの講習の途中で見付け出され、狸の化けの皮を見事に退治された事を白狀しておく。

親愛なるSZ君

山根白星

御無沙汰してゐる。長いこと君に会はずに居るから、どうの、こうのと言つたケチな友情ではなかつた筈だが、君の咳声に、ふれない日は淋しいし、君の端麗な容姿に接しない日は味氣ない。僕の貧乏からくる疎遠と、生來の怠慢と、人生のレーゾン・デートルへの懐疑と——、君、又僕のブアーな哲学が始まつたと笑はないでくれ給へ。初恋のリーベの様に君ありてこその人生と思つてゐる程だから。

僕の人生と君の存在はイクオール・セームなのだから。きつと僕の春信を軽蔑しないで、憐憫程度で済まして呉れることと信ずる。

セント・ヘレナに流刑のナポレオンみたいに、当地に左遷されて二ケ月経つた。「風の中の羽の様に変る女ごゝろ」とはオペラ・リゴレットの一節だが、それか、あらぬかミス・キジヤも九州にウキンクしたり、関西に媚を送つたりしたが、遂に当地で一瞬たが拜顔の栄を賜つた。小用を足し乍ら足袋のこはぜをはめられるのが唯一の女性の特色だと思つてゐたがオツカナイのは亭主を寐とられた妻君だけではないと認識を一変した。引き続き又、冬將軍の来襲で、霏々たる雪は道を沒し、凜冽たる風は膚をつんざくとまではゆかないが、雪を頂いた立山の絶景を眺めてゐると人生觀も変りそう。

左遷に当つて僕のシンパ達が憐みの目を寄せたりしたが、冬はスキーをやるんだなどと昂然と嘯ゐたものだつた。北國の避地での呻吟の句が大阪の檜舞台にアツピールするかどうかは一つの疑問であるとしても、君へのひたむきな憧憬と、情熱の埋火とを今も尙僕の胸に抱いてゐることが、せめてもの君への償いだと思つてゐる。いつまでも「昊下の阿蒙」でない僕の颯爽たるデビューを、そしてルゴエの夢がきつと僕にも幸福を運んで呉れることを信じて載き度い。氣を付け給え、友よ、世の中は悪くなつた。末筆乍ら御尊父路郎師によろしく傳えてくれ給へ。

匆々

男女両性に作用する
プレホルモン
錠剤・射注下皮
塩野義製薬
SHIONOGI

語源探究

浅田右聞

活惚もストリップには顔負けだ

活惚は紀文が、ミカン船で大儲けをして吉原で大盡をきめこんだ頃出來たものだろうと思うが、ストリップの出るまではエロ踊のナンバーワンだつた。この歌の始めに「活惚、活惚、甘茶で活惚」という意味がサッパリわからない。この頃イタリア語を勉强していてフト字引をくると、Capriola（踊り、はねかえり）というのがあり、その複数は Capriole である。ammatire という動詞は狂人にするという他動詞である。この字の接続法二人称複数は a m m a t r i a l e となる。

之は「お前方を狂人にしてしまいたいヨ」の意となる。それで Capriole, capriole, ammaiate delle capriole！（アンダラインの所へ力を入れて読みます）

と云へば「踊りだはねかえりだ、はねかえりおどりでみんなを狂人にしてしまいたいヨ」というほどの意味で「嬉しさに溢れた表現」の様に解されるポルトガル語には類語がありません。オランダにもありません。どうしてもイタリヤ語ですネ。

オセセのコレアイサも（魔につかれた様な）の Corce（踊を復数）aizza（おだてる）となります。所で紀文の頃イタリア人が紀文と交際するほどに來朝していたかどうかは今病床にいるボクにはしらべようがない。どなたか伊語と紀文との関係を御存じの方は教えて下さい。

（筆者・法医博）

お宝の話

吉田水車

今時は百万円をおかしがり

初春早々みみっちいお話で恐縮ですが、一つ景氣よくお宝の話をしましょう。そもそもわが國の運營を司る國会でも先づ予算からほじくられるのは御案内の通りです。

府縣会議でも第一に知事さんが予算の説明をします。会社は勿論個人商店でもお宝が元で大いに発展もし、或は沒落の悲運もかこつ次第とは相成るのです。しかしおかしな事には、「札ビラを追つて墳墓につき当り」と言う句があります。お宝を墳墓へしまう訳でもありますまいが、作者は此作を以て世にお宝の可否を問うてゐるのです。勿論その可否と言うのは、現実的なもの即ち價値ではなく、人間的な觀方からかく詠んだのもでしょう。そうするとお宝は批判されるために出來、且つ実在するのであるのだろうかとの疑いをもち度くなるのです。批判と言う事は、或る対象の下に行はれるものですから、上記の句も强い人生批判の下に詠まれた切実な叫びと思へるのです。えらい理くつめいて來ましたので、少しくだけた方へ向いましょう。

敗戦のおかげで？ 貨幣價値がどうにかなり何千億が國家の予算、地方敗政でさえ何百億を唱える世の中ですから、お酒一合百円したのも尤もです。此割で人の壽命も延ばしてくれたら嘸かし愉快な事でしょう。お宝が増えた事は物價が高くなったとの逆説も成り立つ訳です。嬉んでいゝのか、悲しんでよいのか、その中に人間の價値丈は堅全自立経済で行き度いものです。大阪初戎の吉丁笹には、びかびかした小判が必ずぶら下げてあります。その笹をかついで宝くじの初買いもいゝと思います。宝くじと言へば或るひまな人のこくめいな計算によりますと、連続三百回買はれば当る可能率がないそうです。（初めて買って当った人は多分三百回目に当った人でしょう）そうなるとたしか宝くじの回数は十何回ですから、三百回とするとこれは賣る方でくたびれる事になり相です。

宝の語源は、お米にあるらしいです。なぜなら日本人の命をつなぐお米は、田から取れるからタカラと言う、と申すのは雁玉、十郎さんのお笑いを一寸拝借しました。人間として生れた以上、大いに人生をキョウ楽し度いと思うのは私ばかりではないようです。キョウ楽の定義は人によっていろいろ違つて居りましょうが、合理的に大いに儲けて散ざいして人生を謳歌し度いと思うのもよろしいです。又お宝を單なる経済上の道具視してテンタンたるものも好ましい事です。とにかくあくせくとお宝に追いまわされるのが人生そのもののような世の中は、まだまだ続きそうですが希くはお宝に見放されず又見失はぬ事を心がけて本年も亦我世の春をうたをうではありませんか。

随想

静岡忠八

ふところでお多福あめが溶けかゝり　水車

初戎笹の小判がほゝを撫で

作品は作者の社会觀、人生觀、又は人格を反映する。だから発表する自分の作品に対してはそれらの事を考へて悔いなき様にしたいものである。毎号本誌の川柳をつぶさに読んで居ると昨品を通じてその人物の程度が想像されてほほ笑ましい氣持ちになる。今迄、二号さんを詠んだ句がない事はないぐらいであつたが最近、エロチックな句が俄に多くなつて來た様だ。それがよい傾向か悪い傾向かは読者の判断にまかす事にして、私としてはあまりにだらしない様な感じがして不愉快である。

人間は誰れしも内心エロを好むものでわあるらしいが、だからと言ってかかる句が増加する事は本誌の權威を高揚する立場から警戒すべきではなかろうか。既定の概念に依つて個人や読者の單なる慰みや娯樂として川柳の形式をもてあそぶ者ありとするならば、いつ迄も川柳は低俗なるものとして藝術作品としての仲間入りは出來ないであろう。川柳作家は日常茶飯事のみに題材を求める事なく、つれに社会百般の実体にゆがみなき認識をたかめよりよき生活、よりよき社会発展に役立つ事がなければならない。この世界の動き社会の推移歴史の前道に対し、我等はいかにして生くべきかなにをなすべきかと言ふ目標のもとに、新しい建設的なものを有形無形、直接間接なりとも表現しなければならない。その意味からすれば現代の川柳はあまりに狹少な枠内にはまりきつて居ると思ふ。ラジオの放送や新聞の報導を絶対信頼する様な世界觀、社会觀に立脚した藝術論ではまだ〳〵本質的ではない。人民川柳を浅薄な偏見でけなした人も居るが、こうした人々こそ保守的封建的城を脱せず時代の流れにとり残される徒輩である事を知るべきであろう。世界の動向の底に流れる二つのものの見極めると共に川柳もなんと飛躍して時代と共に、大衆と共に前進すべきであろう。

耳鼻咽喉科
牟田病院
院長 牟田哲三郎（一哲）
大阪市南区長堀橋交叉点西・電話船場五〇〇〇番

1 姫
2 太郎
3 C.C.C.
山之内
强く立派に育てるため
あとはストップ…確実な避妊薬サンシーで！
サンシェリー

詠史川柳

につぽん（五）

戸田古方

古代社會（読）

（三十一）**攝政關白**（一〇—一二世紀）

大伴氏の失脚によつて藤原氏は攝政關白を常任、皇室の外戚として其寢殿造りの住居に幼帝は成人される。有職故実に残るみやびな風習、平安の陽が照る京のうちそと。

女兒出生もうお后ときめている
十二單衣生れながらの足さばき
関白太政大臣という音痴
藤まとう春日の杉は見上られ

（三十二）**源氏物語**（一一世紀）

生活に不安を感じない待權階級の遊戯的生活を素材としたのが源氏物語、後宮三千の大陸の風はいつか日本にも影響したが、それはハレムでも中國の後宮でもなく婦人の自主性はある程度確保されていた。

生き甲斐は屋敷屋敷に女あり
灰色の字治の川霧かき分ける
五十四帳白髪と別れ頬の艶

（三十三）**土佐日記**（一一世紀）

古典を通じて当時交通文化を知る。西に土佐日記、東に更科日記がある。熊野へ度々の行幸、御幸、熊野街道の研究も見逃せない。

五万分の一でみつけた土佐泊
海賊と風はよつぽどようこたえ
捧げものすれば住吉浦は凪ぎ
八十島のすきな所を通り抜け

（三十四）**鳥獸戯画**（一二世紀）

批判精神というものは白鳳天平の頃すでに芽生えはじめ、平安時代になると一そう拍車をかけられる。鳥羽僧正の鳥獸戯画となり、餓鬼草紙、病草紙はグロテスクなうちに時代を諷刺する。

猿も蛙も皆誰さまの顔にて
蛙奴が喜怒哀楽を演じます

（三十五）**武士**（一〇世紀）

莊園領主は腕力のあるものの力によつて本領の保全をはかつた。その腕力者が武士である。地下人とコンマ以下の取扱いを受けていたが実力がものをいう紛争の時代、次第に頭を持ち上げんとする。地方は彼等の存在を必要とする群盗に満ちていた。

海賊と妥協が出來て帆を上げる
人殺しいとあつさりと引受ける

（三十六）**來迎佛**（一〇—一二世紀）

正像末の末法が到來している。宗教は貴族の独占物ではなくなつた。民衆の求法は浄土信仰の方向へ。空也上人の念佛踊や惠心僧都の作品が佛教藝術の遺産として残る。

念佛は踊れるのからまずおぼえ
地獄絵のどれが貴族のなれのはて
南無阿彌陀土によこれた手を合せ

（三十七）**院政**（一二世紀）

藤原氏の頭をおさえる爲めの院政ではあるが、内裏と院の二つの頭は暗流を繰返し、その暗流は天下に禍根を残す。その間にあつて南都北嶺のゆゝしき僧兵と結びついて乱世の徴愈々濃し。

神さまが何だといゝたいのも交り
頭剃つて後宮が忙しく
闘志満々みなけんか鶏飼うている
氏も育ちも忘れ喧嘩をしり給へり

（三十八）**保元の乱**（一一五六）

謹賀新春

（柳人交歓のページ）

冨士野鞍馬
清水市下清水四九一

三條東洋樹
神戸市中央局区内兵庫区
神田町七十九番屋敷

西尾栞
大阪府中河内郡曙川村字
八尾木　電八尾一七三番

足袋はいてさて元日を
何処へ行こ
吉田水車
名古屋市覺月町
一丁目六五番地

弘津柳慶
山口縣下関市貴船町
日本專賣公社下関支局

竹田芦穂
大阪市都島局区内
古市大通四ノ五一

三鴨美秋
米子市道笑町一丁目
三四番地

延永忠美
岡山市南方九四
電話　八二五八番

福田安夢
大阪市東住吉区桑津町
三八八地　O・K・C・

滋賀縣貴生川支部さつき会員
山田季贅
山田スミ子
廣島縣安佐郡可部局
区内亀山村綾ケ谷

富山縣高岡市阪下町八六
橋本產業株式会社
山根白星

熊本縣菊地郡大津町
西口如川

岸南柳
大阪市阿倍野区天王寺町
三〇七一　岸男前製造所

川柳〝ながさき〟
池田可宵
長崎市新大工町

喪中年賀欠礼
中島鉄洲
鳥取市川端町三ノ一五

煩悩具足が人間の常態とすれば、それを如実に示したのが保元の乱である。親子兄弟も恃むに足らず、骨肉相食み共倒れにならんとする。

鼻筋の通りすぎてる不倖せ
人と人悲劇を作る夜が続き
猛々しくも言訳をして父を斬り

（三十九）嚴島（一二世紀）

地下人の武士のうち最初に抬頭したのが平氏であり、平氏をそこまでにしたのが対宋貿易であつた。そのために福原に都をうつし、嚴島の社に海路の平穏を祈つた。

落日の向うの國が儲けさし
攻めてくる迄は管絃も歌もよみ

（四十）平家物語（一二世紀）

祇園精舎の鐘とゝもにおこり、鐘とゝもに亡びていつた平氏、平家琵琶となり、日本藝能に色々な意味で影響を與へた。宗教と人生を経緯として綿々として語り続けられる。

亡霊になれば公達怖い顔
紅かれのまゝ御首級は目をつむり
愛憎を越えて寂光院の冷え
地にもぐる勇氣は公卿のものでなし

聖書 課題吟

高鷲亞鈍選

血と肉がみ霊に挑む福音書　山雨楼
損ばかりしてゐて聖書離せない　九坡
あんな娘が聖書抱いてる日曜日　淑郎
生意氣と別に聖書を持つて出る　曉明
日曜とは聖書手にして会ふ日なり　表情
いつの日か読むことしん聖書買ふ　夏六
バイブルを読む娘は夢の國に生き　鉄兒
洗礼受けてから聖書棚の隅　北海
宴会で聖書を語り座が白け　潤年
稻刈りの合間も聖書を披いて居　一貫
女らしい聖書の花梨　翌柳
聖書読むポリスみんなに親しまれ　齊花
書き込みもあり遺品の聖書読む　臥竜亭
バイブルが素直にきけて余命知る　志津
聖書から抜いた文句が遺書にあり　直郎
繰り馴れた手付で牧師章をあけ　梵鐘
バタリとあけた聖書の二三行　野介
一点の光聖書に点ぜられ　同
バイブルを朗読する間かしこまり　純香
バイブルを片手に子供生み続け　同
佳・パンパンが聖書の文句知つて居た　無骨
佳・バイブルは税吏を罪な者に書き　十九干
佳・死者の枕上清し聖書のただ一つ　蛙声
佳・バイブルの奇蹟（或る日素直に居　正一
佳・バイブルに裁かる俺は前科者　十四郎
佳・赤い爪聖書に懺悔する夜あり　志乃布
佳・聖書たゞ信ずる者の静かな瞳　梵鐘
人・平熱になつて聖書も二三章　安彦
地・キリストの愛え卑屈な俺を見る　翻骨
天・厳粛な二人の前に立つ聖書　忠美
軸・キリストの踵に接吻する寶女

▲愚生の失鶴から多大の御迷惑をかけ、再度御寄鶴を恭うしかくも佳吟を多数頂戴致しました事を厚く御礼申上ます。

一品料理と生そば
グリル芝鶴
上六キヤピトル映画館東三軒目

にきひとり美顔水
綾谷鳳天堂

前田伍健　松山市眞砂町二一
戸田古方　池田市井口堂一六四
京都市左京区淨土寺眞如町四　村松夢裡
増田耕民　鳥取市川端一丁目三七
渡辺完（孫拥）　大阪市北区北扇町四六
杉谷湖山　鳥取市職人町
黄田美秋　滋賀縣貴生川町三本柳
大阪市阿倍野区阪南町中三丁目三八　西いわを
德島縣板野郡板東町東中筋郷　廣瀬志津雄
大分縣豊肥線中判田駅前　桑原儀太郎
布施市三ノ瀬一丁目四　糸本醉月
今治市神明町一〇〇　長野文庫
和歌山市今福北部一二八　秋月宏方
横浜市保土ケ谷区岩崎町一〇　福田山雨楼
兵庫縣高砂局区内高砂鉄道病院　北川春巣
大阪市阿倍野区王子町三ノ三四　菊沢小松園
兵庫縣高砂局区内古浜鉄道公舎　長宗白鬼
佐賀縣西松浦郡松浦村金石原駅前　松野えいを
大阪市阿倍野区北田辺町三四三　水谷竹荘
熊本縣阿蘇郡内牧町西湯浦　成瀬月仙
黒本芳人　廣島縣賀茂郡竹原町
岡山縣英田郡林野町駅前　田村藤波（号緑朗）
鹿兒島縣岩川町五拾町　西祐宗（号華水）
大阪市阿倍野区王子町二ノ五三　山本葉光
大阪市阿倍野区阪南町西二ノ三三　石田沐天（清次郎）
岡山縣倉敷市南町二一〇　木村千代男

いのちある句を創れ

▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

投稿規定

十一月例會（本社）

川柳文化之夕

十一月四日午後五時半
於 大宝文化会館

月に一度の本社句会なれば同好の士誘い合しての集会も楽しき一夜なり、無我の境地に夜の更けるを知らず、折柄の細雨しようじようと音なく詩想呼ゆ名句の披講に拍手もて迎え送る柳人の幸福これに過ぎたるはなし。高鷲亜鈍氏起ちて柳話に熱弁を振るわる詩人の面目躍如たり読いて川柳中興の師麻生路郎先生はつらつとして説き来たり説き去る青年路郎を強調され、最後に藝術と文化に付いてその卓見に接す得る所大なりと言ふ可し、時に九時盛会裡に散会。（文蝶）

出席者＝路郎・文蝶・默平・北海・志乃布・春草・万的・香林・哲水・古方・柏葉・正司・妄夢・豆秋・胡蝶・丹路・晴峯・志津雄・小松園・愛論・花村・玲之介・芦穂・貴山・栞・亜鈍・野介・柳亭・星登・酔歩・夢裡・生々庵・葭乃・梨里

兼題「運勢」　麻生路郎選

運勢の本へ女房の口がすぎ　栞
運勢を否定してゐるガード下　鉄兒
降職で我が運勢をさとりたり　季賛
大患いから運勢がチト変り　春巣
運勢は自から開き強く生き　晴峯
浮き沈みバーヂも解けた菊日和　正司
辻占は吉されど不運は続く　星登
運勢を言ふて良縁とり逃がし　一貫
運勢判断まだ宵の口さくらなり　誓天
運勢も相性もよく家がなし　花村
運勢のよいのに昨日死にました　志津雄
運勢見自分の運はまだむかず　柳亭
運勢へ廣い屋敷をもて余し　豆秋
迷信と笑いきれない黒い星　久米女
運勢がどうのこうのと丙午　同
運勢はまだ御陰居にしてくれず　若栞
運勢「凶」みくじはなかまれたり　妄夢
開運を信じ女の二十八　同
運勢を信じ善人完納し　哲水
ひと儲けしてから運勢氣にしだす　正司
こんな運勢とは共産党も知らず　栞
運勢の通り赤字の下半期　同
運勢とは別に婚酔呑んで死ぬ　亜鈍
運勢を一変させた宝くじ　酔歩
運勢はチリメンジャコで南無阿彌陀　玲之介
七轉びころんだまゝで棺に入り　野介
幸運の家に不具の子が一人　默平
運勢はあなた任せの角かくし　酔歩
さもあらん八方塞がりだと云われ　者栞
運勢に勝てず長家で息をひく　路郎

兼題「赤い羽根」　武部香林選

旅すれば旅先で又赤い羽根　春草
しばらくは子につけさせた赤い羽根　貴山
赤い羽根義務を果したように着け　默平
一本は和服の時の分の羽根　同
赤い羽根美人の方へ金を出し　北海
赤い羽根へ肩いからしておし通り　野介
おつさんの帽子切符と赤い羽根　濶年
駅前で赤い羽根買う旅心地　春巣
赤い羽根ためらいながらもちいうけ　夢裡
競馬場踏みにじられた赤い羽根　貴山
スリ今日は赤い羽根をつけて出る　栞
赤い羽根魔除けみたいにつけている　古方
赤い羽根つけてくれるに伸び上り　豆秋
失業をしてゝも赤い羽根つけて　栞
私より貧し人あり赤い羽根　光
ルンペンも拾ってつけた赤い羽根　同
秋晴へ心も軽く胸に羽根　十九平
赤い羽根ラッシュの中の栞つぼ服　胡蝶
荷車の馬もつけてる赤い羽根　柳亭
赤い羽根つけて夕餉の客になり　木人
服替えて又買わされる赤い羽根　晴峯
アベックが氣前よく買う赤い羽根　同
共同募金の隅に無口な娘が立ち　万的
赤い羽根を女は女らしくつけ　同
赤い羽根病める心になつて買い　美秋
逢いに来る胸頼母しい赤い羽根　同
赤い羽根つけて夜学の子が通い　正司
清貧の胸にせめての赤い羽根　同
赤い羽根親のない子の乳になれ　玲之介
足どりもそれから軽い赤い羽根　花村
拾円で人前に出る赤い羽根　香林

兼題「マネキン」　西尾栞選

マネキンをやつぱり男の眼で眺め　胡蝶
マネキンは恋を知らないやうに立ち　香林
マネキンは違つた街に職場持ち　正司
マネキンにある暇一輪挿を活け　万的
海渡りマネキンドールもドル稼ぎ　北海
逝く秋やマネキン人形鼻が欠け　沒食子
マネキンを雇たで税が尚かゝり　同
マネキンは声迄クリーム塗つたよう　北村
マネキンの化粧やさしくなぶられる　夢裡
マネキンがしゃべる間美人が一人出来　茶々
マネキンが着てゐたほどに引きたゝや　十九平
マネキンへ明治の柄のはずかしく　久米女
ストリップショー程マネキン肌を見せ　春巣
マネキンのルージュがあせた午后三時　酔歩
マネキンの化粧落した肌の荒れ　志乃布
マネキンの帰りは地味な柄で出る　妄夢
万引をマネキンだけが知つていた　美秋
アベックへあれマネキン眼が流れ　小松園
マネキンのこのまゝ帰りたい衣裳　默平
花嫁になりきりマネキン下を向き　貴山
マネキンのポーズへ秋の陽が覗き　野介
マネキンも手持ぶさたな秋の雨　豆秋
マネキンの帰り寒むさうなのに着替え　同
マネキンの幸福素顔のときにあり　濶年
マネキンのその儘ほしいニユールック　哲水
マネキンのすきな白粉別に有り　晴峯
マネキンのアンコ姿を親しまれ　栞
マネキンはしやべり〳〵手にとらせ　同

席題「蟲負」　友淵貴山選

海外にひいきも出来た新帰朝　北海
蟲負眼で見るくせがある淋しい子　春草
御蟲負へ巨体のぞかす角力茶屋　酔歩
ひいき客何やら云ふて投げてゐる　柏葉
御ひいきが無くても葬儀屋たつてゆき　花村
勝写版へ蟲負の子殘される　栞
蟲負客轉宅そう〳〵尋れて来　花村
御蟲負へ味叱られた縄のれん　柳亭
病ついてせめてラジオが蟲負する　愛論
蟲負又貸してあるのも忘れて居　文蝶
花道の埃蟲負の顔へ飛び　芦穂
好物をちやんと知つてる蟲負客　香林
花東の主はヒイキと書いただけ　野介
御蟲負にそむかれし日のコップ酒　丹路
蟲負から蟲負へ生きてゆく女体　同
御蟲負はスターと同じとこで泣き　妄夢
ターキーや越路が好きで胸を病み　同
蟲負客同士採めてる樂屋口　小松園
蟲負客嬉し涙で馳けつける　同
蟲負客酔ふて何やら描いてくれ　豆秋
蟲負客のそり裏口から這入り　同
フイナーレへ蟲負の声がかれてゐる　万的
ひゝきとしてそのセスチユアをうれしがり　同
盲目なひいき悲しい抗議なり　胡蝶
蟲負弁走家も屋敷も捨てちまい　同
御蟲負に済まぬが恋は讓られず　玲之介
妻いつもかぼう子のあり目鼻立　同
御蟲負へ素顔で急ぐ富士郎　同
せめてものスターと同じ服の柄　妄夢
蟲負筋ドルの國にもある强み　北海
御蟲負にしられてからの廻り道　古方
三階の倦もひいきの一人なる　貴山

席題「平常着」　奥村丹路選

平常着の男は嵩のたかいもの　玲之介
末席で平常着同士うまが合い　妄夢
平常着平常着職に追われてゐたわたし　万的
平常着の母を見つけたPTA　酔歩
PTA平常着同士口が合い　春草

平常着の強さで税にたち向い　柏葉
お見合を平常着でするつゝましき　晴峯
とうとうお召を平常着におろし　古方
平常着の妻の笑貌を疑はず　正司
平常着に替えて淋しさ急に増し　同
エプロンを借りて平常着よく動き　默平
座布團を除けて平常着隅に居る　同
平常着で來たのがいっち泣いてくれ　小松園
猥談になって平常着喋り出し　同
常着でも姉妹が來て派手になり　愛論
父還る迄平常着で居るつもり　同
平常着が大島になる二号宅　亞鈍
平常着がそのまゝで通つている詩人　同
平常着のだがあなされぬ眼鼻だち　香林
大島が平常着といふ大臣さ　栞
平常着で來て御不幸へ行屆き　玲之介

川雑布哇支部

ウイロー社川柳大會

十月一日　於　東雲別莊

借金・ネクタイ

借金もなく凡庸の身を支え　晩翠
卒業の子を借金が待つて居た　純香
借れるだけ借れば男の腹が出來　快夢起
云ひ勝つて見たが淋しい借がありいつそもう体で拂ふ事に決め　流水
借りた金返して女強くなり　草一郎
借金へ佛にすまぬものを賣り　大彦
正直の果は借金子へ讓り　流水
借金でからみ取られた未亡人　亭駒
借金の出來る間は友もあり　紅宿
折入つて頼み高利の金を借り　芳雨
出まかせの云訳さらせ拂はぬ氣　魔花麗
手土産もあはれ借金ことわられ　快夢起
あゝ云うて借りては來たがさて怖い　曉舟
借金が出來て一人前になり　宿六
古疵は金を返さぬだけの事　霞坊
女房に云へない借りも二つ三つ　河舟
有る振の見栄が遣つた今日の借　一牛
よく實れた顔で借金派手にする　柳葉
氣安さはついノータイで行くと決め　夢想兒
ネクタイに若き日の夢今日の夢　魔花麗
女事務來てネクタイが派手になり　沙兆
ネクタイへさわりセンチな事を言ひ　亭駒
鼻唄で結ぶネクタイ空は晴れ　曉舟
幸福の予感ネクタイぐつと締め　柳葉
ネクタイを外せばもつと飲める顔　草一郎
老いらくの恋ネクタイでそれだ知り　純香
一本のネクタイ親子して結び　快夢起
行先を云へぬ苦しさタイを締め　夢想兒
よれ〳〵のタイも笑へぬ子沢山　耕三
生活に負けたネクタイの色が言ふ　我樂多
女ごころネクタイの皺見のがさず　笑有
われ未だ老いずと計り派手なタイ　旋風
寫眞説明　前列右より柳葉・草一郎・曉舟・笑有・長洲・河舟　中列＝純香・加里比・雅一・泉水・晩翠・法寸　後列＝富士雄・流水・麗花麗・快夢起・沙兆

川雑

東京支部句會（東京）

十月廿八日　於　烏野ビル　川村好郎報

電話帳・めくら・ネオン・秋晴れ・旅館

電話帳繰ってわかつた借電話　好郎
急病へまだ見つからぬ電話帳　同
あちこちへ電話番号繰る嫉妬　同
電話帳前にあせつている幹事　山雨楼
番羽屋を本名で繰る電話帳　不二
成功をして電話帳太い文字　山雨楼
電話帳家号が思ひ出せぬなり　不二
チヤブ台の隅に盲のコツプ酒　好郎
黒眼鏡子に引かれゆく元中佐　一郎
ネオンから少し離れて焼鳥屋　山雨楼
ネオン少し此処が田舎の銀座です　一郎
懐しのメロデーもよしネオンの灯　不二
秋晴れにフラリ画展を覗きに來　一郎
秋晴れの空へ記録のホームラン　不二
秋晴れを濃艶飾とおむつ干し　守夫
秋晴れへ天氣予報の雲が來た　不二
秋晴れだ僕は集金のペタル踏む　好郎
山の宿歌人は何と歌ふだろ　稲水
集金が出來てホテルにとまつてみ　登志
旅館だかつれ込み屋だか湯のけむり　高志
御商談に御同伴にと書く旅館　同
アベックに探偵趣味の女中の眼　一郎
流々辛苦やつと彼女と來たホテル　好郎
旅館では手持不沙汰に女房居り　守夫
処女に別れる旅館のスリツパ　不二

川雑

出雲支部句會（出雲市）

十一月十一日　於　出雲市公会堂　尼絲之助報

霜・解除・見合・手帳・素通・藥

初霜を見て干柿は味を出し　絲之助
鶏既に食に飽きたり霜とけて　樂庵
一番列車レールの霜を消して行き　鳥人
お嬢さんのノー靴下に霜厚し　大朗
番傘も立てて白菊霜をよけ　萩枝
解禁のもう銃声が谺して　代仕男
追放解除鰻昇りの炭を買ひ　蓮好
政情え意見は盡きず解除の日　萩枝
追放解除まだ生きて居つたのか　夫痴人
追放解除男の夢をもう一度　独仙
記者の顔を懐しく見る解除の日　青子
見合した首尾を氣にする故郷の母　美笑
お茶を賞めお花を賞めて見合すみ　拓牧
見合には庭石ばかり見て帰り　絲之助
胃の腑にしみる酒なり　大朗
古手帳ふと傷心に触れて來る　明朗
素通りをする氣オーバーの襟を立て　絲之助
素通りべ明日は支拂ふ要にして　独仙
粉藥の殘りも嬉し退院日　壯
藥瓶秋の光はさすやうな　大朗
目藥一滴素直に受けて女綾る　みのる
煎藥のたぎるをちつと聞いて居る　大朗
藥瓶芒の土堤え廻つて見　絲之助

川雑

竹原支部句會（廣島）

十一月十一日　於　福岡藥留路居　黒本芳泉報

鐘・夜・切符・名物・北國

鐘に明け鐘に暮れ行く里に住み　芳泉
女專出を夜の女に何がした　和郎
除夜の鐘聞く頃姉の帰が出來　賀清
そわ〳〵と夜を待つてる不孝者　富穂
入口で切れた切符をさつと出し　賀清
検札へあわてた切符が見付かず　愛鳩
切符拝見狸寐入りへ來て起し　芳泉
御來賀を顧う切符が添へてあり　同
あてもなく家出は切符買つて乘り　愛鳩
改札へ切符は負ふた子が渡し　藥留路
商人と共に疲れた赤切符　同
名物を買ふて電車に乘りおくれ　賀清
名物へどれが本家か迷わされ　藥留路
新しい名物が出る観光地　愛鳩
口紅も夜の女と云ふ濃さ　藥留路
夜の汽車踏切番の息白く　同
釣帰り夜の警戒線にふれ　愛鳩
夫帰る夜の女に悩みあり　芳郎
冬籠りする氣で北へ行く二人　愛鳩

雑川 **岡山支部句會**（岡山市）

裸体美術展協賛川柳大会　十月八日　於 川雑岡山支部

美術・展覧会・見物・良縁・二日　蓮本 満年報

酔・算盤

色と線上野の森を秋にする　正一
税務署も評價にこまる美術品　大甲帽
値を聞いてから美術品見直され　柳風子
美術館わかつたような顔で出る　通常
上野ちと美術の秋へ化粧する　風来子
二代目の手からはなれた美術品　久米雄
没落の藏の名画は虫が食い　日出子
展覧会催物で客を寄せ　吉備平
写眞展ヌードのとこの人だかり　久米雄
衛生展見て来た当座含嗽する　十九平
展覧会つき合うだけの妻の足　中山子
本人が受付にゐる個人展　聰夢
そのあとで見合と知つた展覧会　北海
展覧会へ名士一廻顔を見せ　七面山
美術展老母は阿彌陀に合掌し　九六
追込みに入つて馬券がしわになり　四案
釣る人の背に見物は靜かなり　七面山
見物の中に盗る眼と捕へる眼　三葉
見物が散つてハンスト腹が減り　弓削平
良縁と言われ頭をかくばかり　風来子
良縁は異の方と易者云ひ　忠美
良縁へ父の氣持が動きかけ　久米雄
母さんが嫁ぎたいよないゝ話　鉄兒
二日酔障子手荒くしめる妻　茶々
吹殻を見つけて喫つた二日酔　通常
二日酔隠して朝の門を出る　柳風子
今夜から禁酒だと云う二日酔　酔劇
急病と届けておいた二日酔　満年
二日酔水のうまさへ目をつぶり　正一
二日酔疑いもせず看病し　茶々
算盤の合わぬ話へ横を向き　聰夢
算盤の出來る社長をうるさがり　高良
算盤へ儲けた分は別に入れ　鉄兒
意見するにもソロバンを入れる父　弓削平
ソロバンは合つてるけれど十二月　淑郎
算盤へ何度入れても足らぬ月　鉄兒
算盤へ十六銭が邪魔になり　同
算盤を中に話がまとまらず　大甲帽

雑川 **貴生川支部句會**（滋賀縣）

十月二十九日　於 観月居　美秋 報

読書・菊・バス・冗談・評判

公休の読書をひまな事にされ　苑女
毒ですよなどと女へ本を貸し　斗志
読書好き課長の前に席が行き　木人
チヤタレーを読む手でニキビつぶしてる　斗志
良いとこで読み止めに成る散髪屋　木人
常識はゼロで古典にかじりつき　苑女
八時間勤務の中でする読書　美秋
菊活けて今日は見合と言ふ晴着　苑女
満ち足りた心白菊活けた朝　文子
活け終えてお師匠菊の値にふれる　苑女
道楽を皆しつくして菊づくり　種三
見て欲しいけんがい店のはなに出し　美秋
兄逝きてはや一年の菊を折り　斗志
バスガール顔に似合はぬ声を出し　種三
アベックはバスの通らぬ道を選り　春巣
田舎バス車掌の声でやつと発ち　季賛
楓の木大きくまがる登山バス　文子
今日やつとバスが通つた文化村　苑女
祭礼へバスは儲ける数を出し　美秋
美しい紅葉をバスで観て通り　苑女
田舎バス牛のよける間待たされる　文子
終バスのこゝでも拾ふ二人連れ　斗志
田舎バス子の小用を待つてやり　美秋
評判をすぐ氣にしてる苦労性　観月
評判の女給に程くあしらはれ　木人
悪評を背に未亡人強く生き　文子
ぶしつけに言ふ冗談をもて余し　観月
誘惑へ冗談言うて逃げておき　斗志
世渡りのうまさ冗談など言ふて　文子

雑川 **吳支部句會**（吳市）

十月七日　於 吉浦消防團楼上　林野 甦光 報

再婚・濡れる

後添が批判を受ける一週忌　高馬
花嫁がなれた手付で受ける盃　九晃
再婚へ子の可愛さが先に立ち　蔦峰
再婚はせぬ氣勘めの定期買ふ　正一
一週忌待つて義弟と添う噂さ　秀峰
再婚へ今夜限の子を抱き　同
再婚は近所の知らぬ間にすませ　甦光
再婚へ心の張りをゆるめて見　正一
安定所から再婚をすゝめられ　同
濡れた眼を見つけ意見の声が落ち　紅兒
馬方も馬車も時雨に濡れて來る　哲也
横綱のちよつぴり濡れた蛇の目傘　秀峰

胡神社祭例句會

十月二十二日　於 胡神社仮舞台

噂さ・花・鳥居

噂なぞフーンと笑ふ爪を染め　紅兒
噂程上手ではなし旦那藝　魚幸
床の間で花が枯れてる旅の宿　同
寄り添ふた傘が噂の中を過ぎ　甦光
孤独淋しや一輪挿みつめ　彩峰
茶も花も出來て流轉の訳を秘め　十進
共学のおかげで知つた花言葉　史球
合風の予報へ菊のそえ木立て　春霞
変り者菊には冴えた腕を見せ　高馬
菊の花トンボの重さだけ働き　紅兒
大鳥居カメラに入れて旅を終へ　史球
玉替は鳥居の前でよくはづみ　櫻草
宮島の写眞屋鳥居で食ふている　魚幸
日参に此の鳥居ともよく馴染み　哲也
忘れてた鳥居目につく秋祭　千代
満願の鳥居せつない氣でくぐり　蔦峰
朱の鳥居こゝから帽子ぬぐところ　正一
参拝の写眞鳥居を背にする　彩峰
大鳥居子供の頃の夢が浮き　白竜
四五人が両手で測る大鳥居　瞳
鳥居から寄附の順序に立つ石碑　高馬
ばあさんの膝を伸ばした大鳥居　史球
鳥居から抱かれて上る雪祭り　甦光

雑川 **弓削支部句會**（岡山縣）

八月九日　和鱉様納涼会　於 泰西寺　福島 鉄兒 報

幽鱉・團扇・蚊・雷・変装・植木・泣き事

幽鱉が火を借りてゐる樂屋裏　麦秋
幽鱉の話がうまい二階借り　笑泉
幽鱉の話しながに灯が消へて　老骨
試胆会幽鱉取つて投げられる　十九平
幽鱉に食わす米まで供出し　鉄兒
幽鱉の話になつて肩がふれ　満年
安すぎる家賃幽鱉出るかしら　しげ女
アベックへ幽鱉チツと意地になり　弓削平
ないしよ言團扇で呼んで耳打し　しげ女
待ち時間借りた團扇に礼を云い　ラッキー
貰い風呂ついでに團扇かりて居る　夢成
中元の團扇粗末に扱われ　喜多八
言い分があつて團扇を持ちかえる　久米女
御佛へ合すその手で蚊を叩き　風船
蚊に喰われながらも恋に忙しい　鉄兒
順々に蚊帳へ追い込む子沢山　凡太郎
叩かれたとこで終つた蚊の命　久米女
逢引は蚊にさゝれつゝ　湖月

受話機持ち替えに其の手で蚊を叩き　娯句樂
課長さんの家によばれて蚊に食われ　弓削平
足の蚊を品よく拂う藤間の娘　三和
枕蚊帳ひつくり返す程育ち　一休
蚊の中で借用証書やつと書け　久米女
蚊の様な声で花嫁挨拶し　野人
税務署は蚊の鳴く程に聞いて居り　弓削平
落雷で抱きついたのをチヤンスにし　十九平
落雷の水のさけ目にも春目さす　六郎
雷の太鼓は父が書き添える　笑泉
雷に妻うろたへてうろたへて　鉄兒
雷へ姑に似合ぬ氣の弱さ　夢成
何様の住居ぞ高う避雷針　不老
男装へみさかえもなく同ぼれし　野人
変装の化粧くづれる程踊り　不老
変装をしてまで囲の来遅び　七面山
変装へ妻の着物を派手に着る　久米女
変装のマスクが落ちたあわてよう　湖月
変装の親父に女房付きまとい　哀水
変装のお染久松腕を組み　茶々
父逝いて植木殉死の様に枯れ　十九平
泣き事へ夫新聞読み続け　七面山
こちらから云いたい泣き事聞かされる　鉄兒
泣き事へ押へる様にお茶を入れ　牛歩
泣き事も云わず内助のミシン踏む　久米女

雑川　**備前支部句會**（岡山縣）
九月三十日　於　大森娯句樂居
遠い・淋し・生活・居眠り
遠來の客と言うのは無心で來　苑女
頬杖へ溜息ばかり出る生活　同
居眠りをして富士山をみそこない　唐辛子
争いに勝つて淋しく独り寝る　清風
老いらくの恋は遠出ときめており　一葉
子を思う母へ子もまた淋しがり　久米雄
立候補して遠縁に足を向け　正洲
顔拭いてから遠來の客となり　柳風子
居眠りがつく程駄弁続けられ　娯句樂
生活がこれだけ違う門を辞し　久米雄
居眠は帰れ帰れという構え　同

高砂川柳大會

大阪高砂工場鉄道倶楽部管理部化交局

出席者
前列右より＝勢火・白鬼・路郎・春巣・ひろし
後列右より＝工鬼・和笛・鶏水・乗頓馬・杜巣・流的・苦楽会・句沙彌・蘇堂・十九平・成行・たさし・梨花女・一九・斗鶴・塔月

南区医師会　川柳同好會（大阪）
十一月廿一日　於安岡医院
縁談・夜学・台所
ウインクを交はし縁談駄目となり　一哲
耳打の様に縁談話し出し　生々庵
この縁談マア保有米取つてから　捨舟
縁談に無理な無盡を三つ掛け　同
断われぬ縁談恩師持つて来る　無名林
縁談より試験管ですり理博ですす　同
住宅が当り縁談煮えてくる　捨舟
縁談のェの字も云へぬ娘の弱さ　無名林
縁談と云うて難なく暇を取り　捨舟
勉強しや夜学に通う子もあるで　無名林
角帽の手前夜学と云ひかれる　迷路
青春の夢を夜学の灯に描き　端川
夜学から帰れば母の踏むミシン　生々庵
夜学の帰りネオン逆らう様に映え　同
夜学までして結局は係長　捨舟
合格の名前夜学の方にあり　同
一べんは夜学に籍も置いて見た　無名林
豊の字は酔めぬと笑ふ老社長　同
あきれたれそんな夜学であつたのか　珊枝郎
台所は女中任せの暮し向き　一哲
新築に主婦が自慢の台所　珊枝郎
まだ何かあるかと台所かきまわし　同
病原の検索台所から始め　同
台所時々破れた音もする　鳥耕
台所片手に子供育てあげ　一哲
カーテンのここから先が台所　無名林

日の丸句會（取鳥市）
十月二十日　於工場事務所
河村日漪子報
お嬢さん・煙・デパート・妹・足音
お嬢さんと呼んでた頃もあつた恋　遊星
肩書もあわれや人を焼く煙　日漪子
百貨店上まであがつて下で買い　秀和
デパートへ重役と寄るBランチ　日漪子
デパートで寶子の視線あびて逃げ　遊星
妹に比べて妻の見すぼらし　吾柳
妹の良縁逃がす兄があり　柳窓
又飲んで帰つたらしい足の音　芳道
しのび足大事なとこで音を立て　柳八
見舞客足音にまで氣をつかい　柳窓

九月廿七日　於吉岡温泉新生館
月見句会　河村日漪子報
温泉・豊作・名月・舟
とけてへんかと温泉を覗きに來　日漪子
孝行の眞似温泉へ老母を連れ　芳道
決局は温泉宿で捕へられ　同
馳落の二人湯泉宿に居た　遊星
豊作の水車くる〳〵廻つてる　至高
曳舟にこゝまでゝえゝ声をかけ　日漪子
日傘さす沖の小舟が氣にかゝり　卜天
名月や今の土砂降り嘘のやう　義雄
名月に虫の動きが見える庭　日漪子

待望！　待ちに待つた
自選川柳年刊句集
昭和廿五年度版
B6判　三六〇頁　三百円　〒廿円
北は北海道から南は九州に至る、全日本代表三百六十有余川柳作家自選十句　住所付総覧
發行所　しなの川柳社
松本市大名町七一

靜動

▼本社師走川柳大会は十二月二日午後五時半から大宝文化会館で大盛況裡に開催、九時閉会後、川柳不朽洞会の忘年懇親会を開く▼大阪交通局川柳会師走大会は十日午後一時から市電天王寺仮泊所楼上で開催▼大阪遞信病院師走川柳会は十六日午後二時から三階図書室で開催▼夕刊山陽発者川柳大会は十七日午前十時から山陽新聞社楼上に於て開催▼南区医師会川柳同好会は十九日午後七時から藤原病院で開催▼南海電鉄師走川柳会は廿一日午後五時半から南海高等学校楼上で開催▼千石荘体温川柳会（見塚市）は十二月廿三日午後一時からサンルームで開催以上何れも路郎主幹出席▼川雑弓削支部句会（岡山縣）は十二月二日、金光教神殿で開催▼同婦人句会は三日、金光教神殿で開▼弓削校さつき句会（岡山縣）は弓削小学校で開催▼川雑岡山支部句会は十一月廿五日弘済会ハウスで開催▼川雑岡山縣廳支部句会は十一月十八日に開催された▼川雑下関支部句会は十一月十八日、下関駅長公舎で開催▼川柳噴煙吟社（熊本市）では一月七日に創刊一周年記念川柳大会を開催すると▼紅葉狩川柳大会（熊本縣）が十二月三日八代郡宮地村公民館主催で開催▼西野斗四翁氏は熊本縣八代郡千把村会地丁へ移轉▼葛原秀鶴氏（岡山縣）は水甫と改号▼渋野西谷氏（岡山縣）は奇童と改号▼山崎海栄氏は長崎市中小島町一二四へ移轉、夢路と改号▼寺崎三峯氏は岩手縣釜石市新渋町一へ轉居▼橋本晴の助氏（津山市）は、昨秋第二回西日本川柳大会に縣知事賞を獲得された定金白柳子氏並びに夕刊山陽柳壇の十二月に、第一席に入選された林照子女史を津山柳界の誇りとし、その欲びを記念するため、信頼（白柳子選）感謝（照子選）の句を募り小冊子を一月に刊行されるとのこと▲川雑竹原支部（廣島縣）の福岡葉留路、黒本芳泉両氏は去る十一月五日の呉市主催文化祭川柳大会に出席、両氏とも市長賞天位を得られた。句は「田舎から届いた芋に故郷の土」葉留路、「審判所元の夫婦にして帰し」芳泉。▼川雑岡大支部句会（岡山市）は十一月十一日学生食堂三階で開催▼宇部晴風寮小集（山口縣）は十二月十日に開催▼冨士野鞍馬氏（清水市）のおたよりでは十二月一日から六日間、静岡松坂屋で開かれる柳展のため多忙とのこと▼毎日新聞社事業部報道課（大阪）では南海屋上のスカイサインに十二月一日から「電光柳壇」を新設投句を歓迎している▼小畑自由朗氏（兵庫縣）執筆の喜劇「熟柿」が曾我廼家十吾氏によって上演されるさうだ。▼東野大八氏は岐阜縣加茂郡太田町深田へ移轉された▼山田陽々氏は石川縣山中温泉薬師下へ轉居▼長宗白鬼氏（兵庫縣）は十一月廿三日の國鉄高砂川柳大会後、淡路洲本へ出張されたが、三熊館に宿泊して路郎主幹の「春の艸代議士などに踏まれるな」の短冊がかかつていたので体のぽかぽかと温かくなるような氣がしたとのたよりに接した。▼大西迷窓氏（川雑岡山大学支部）は十一月一日華燭の典を挙げられた。▼橋本操子氏（岸和田市）は十一月廿六日の京阪神交歓川柳大会で教育委員賞を獲得された。

都信（3）

福田山雨樓

一昔前にSと云う友達の家に細君の病氣見舞に行つたことがある。そこの一人娘T子ちゃんは当時まだ学童で、ほんとに愛くるしい可憐な委であつた。恰度家の二男と同い年だとの事であつたが、こうも女の子はやさしいものかと感心したのであつた。

ところが十一月号の「婦人公論」を見るとそのT子さんが高等学校の三年となつて「テイーン・エイジャーは何を希望し、何を訴えるか」の座談会に出て「私たちはもう学校を馬鹿にしきつて〃卒業免狀もらえばいいんだから、あと一年れ〃なんといつてるだけで、よくしようなんて氣持はないわ」としやべつて、とうとう退学にまで問題を発展させた記事をよんで、僕はあいた口が閉がらなかつた。

川柳不朽洞會

指導　武部香林
廊生路郎　戸倉普天

賛助
池沢樂居　浪玲之介
長谷川一徹　小川靜観堂
笠原路生　吉田水車
長野晴渋　上田翠光
藤村作　須崎豆秋
淺田一　来本貴志子
末弘厳太郎　石曾根民郎
中田守雄　大西八歩
白川朋吉　中西おさむ
高沢一浪　長谷川春巣
中村祐吉　布施筑川
高安六郎　尾崎方正
戸田古方　関根山彦
藤村雅光　櫻川不水
田中辰二　好崎申仙
前山北海　菊沢小松園
古川魔花麗　内藤草一郎
三輪晩翠　清水白柳子
水谷鮎美　逸見灯竿
村松夢裡　鈴木九坡
亀井晟修　夷一笑
田村孝之介　鈴木石鹿
高尾亮雄　井村寒浪
山本雨迷　小川恒明
安川久留美　北林松代
山路閑古　宮田不二
前田伍健　大森風来子
柴谷宰二郎　岡島嶺泉
蛭子省二　西垣錦風
西島〇丸　木下幽玉
川村好郎　中島鉄洲
廊生葭乃　新川博也
橋本緑雨　尼崎緑之助
高鷲亜鈍　永谷竹荘
沢田四郎作　西尾栞
永田里十九　小谷琴水
高田抱逸　小橋隆如
石浦柳水　弘津柳慶
村田流水　吉田圭井堂
中島生々庵　小坂蕊雨来
奥村丹路　小田沙兆
市岡暁舟　杉谷湖山
三鴨美笑　林盆丘

―正會員―
市場浪食子
吉田水車
須崎豆秋
石曾根民郎
中西おさむ
黒川紫香
竹内潮花
北川春巣
櫻川不水
関根山彦
好崎申仙
菊沢小松園
逸見灯竿
清水白柳子
夷一笑
鈴木石鹿
井村寒浪
小川恒明
永谷琴水
小橋隆如
弘津柳慶
吉田圭井堂
小坂蕊雨来
杉谷湖山

―特別會員―
中島生々庵
奥村丹路

不朽洞會員

不朽洞会から

▼高鷲亜鈍、大西野介の両氏は十一月廿六日の大阪市復興文化祭京阪神交歓川柳大会で市長賞を、橋本緑雨、須崎豆秋の両氏は教育委員賞を獲得された▼路郎師は十一月廿九日に支部設置の用務を帯び京都へ出張され京都通信病院で大鶴喜由、村松夢裡氏と懇談された▼福田山雨楼氏（横浜市）の厳父伸村品吉氏が十二月四日郷里岡山縣で永眠された行年七十八歳、謹んで悼む。なほ山雨楼氏は葬儀のため八日の夜行で郷里に西下された▼黒田笑泉、福島鉄兒の両氏（岡山縣）は十一月十一日夜弓削町から一里半の山中にある松村の句会に出席されたと▼服部十九平氏（岡山縣）は十二月十七日、松江市で開催された復員局の会議に出席された▼吉田水車氏（名古屋市）は文化の日に市が作品展示会に無鑑査で半切を展示された▼三鴨美笑氏（米子市）は十月から鳥取縣淀江町の伯州水産株式会に勤務された▼西辻竹青氏（奈良縣）は「川柳を通じて顧れた税の種々相」を三本松村情報に執筆▼浜田久米雄氏（岡山縣）は十一月廿日午後六時JOKKから川柳に関する放送をされた▼石曾根民郎氏（松本市）は全國三百五十八作家の「自選川柳年刊句集」を刊行された。氏の労を多としたい（前号廣告参照）▼河村日濤子氏（鳥取市）は日の丸自動車の鳥取工場分離問題で多忙らしい、働くに忙しいのと違って心配ばかりの疲れに駄句一つ出ない有様とこぼしていられる▼尼絲之助氏（出雲市）は旧冬十一月十一日川雑出雲支部秋季川柳大会を開催、米子、松江からも出席があり盛会だつたと、なほ同支部は本年が創立廿五周年になるので秋には路郎主幹を招いて大々的に句会を開催すると▼路郎師は十二月一日午後三時から住吉局職員のため同局楼上に於て「生きることに就て」と題し、柳句による講演をされた▼直原七面山氏（岡山縣）は目下各警察有線取替のため多忙の由▼沢田四郎作博士（大阪市）は「熊岳城温泉附近遺跡の研究」を刊行考古学界に好資料を提供された（非賣品）▼藤村雅光氏（大阪市）は詩集「ブックマッチ物語」を大阪市阿倍野区阿倍野筋五丁目二七なにわ書房から上梓、頒價一五〇円▼成瀬月仙氏（熊本縣）は十二月十五日に華燭の典を挙げられたおよろこび申上げる▼須崎豆秋氏は川雑の企画委員として新春川柳大会のため大童である。同氏の労にむくゆるためにも新春句会には賑々しく参会されたい。▼本社の師走川柳大会が盛り沢山のプロですばらしい効果を挙げたあとで、不朽洞会では忘年の乾盃に移つた。理事長の生々庵博士がウヤウヤしくチクオン器を壇上に運んだ。流れ出た妙音は堀小潤梅女史が三十分ほど前に吹き込んだ川柳小唄である。耳を傾けると葭乃女史の「飲んで欲し」の句と路郎師の「おれに似よ」の句をタイアップしたもので一同をアッと云わせた。

新会員紹介

十一月

成瀬月仙氏（熊本縣）正抱逸氏推薦

十二月

若林草右氏（兵庫縣）正
足立春雄氏（大阪市）正
方正氏推薦

阪田謄写版

株式会社 阪田商会

大阪市北区芝口町五二
電話 福島 九九五一番
五六三一番——四番

高級化粧料容器には勿論！
ヤマギンの……
黒硝子
大阪市大淀区長柄
西通一丁目四番
山銀株式会社
電話堀川四四四七番

増田耕民　高山朗笑
國弘牛休門　杉山一貫
佐野卜占　家本富至
上田春柳　横部牛歩
友淵貴山　服部十九平
小沢史葉　大森娯句楽
森下愛論　長谷川三司
小西無鬼　在間小楼
大西柳堂　山口秋花
大鶴喜由　岡田紫雲
久連松春月　吉田斜水
吉田良子　岸南柳
太田良子　松井可笑
静岡忠八　松江梅里
丸山弓削平　荒木哲水
直原七面山　山中志乃布
黒田笑泉　桑原表情
上林粗影　上坂茂
狩野燕子　成瀬月仙
岩崎樹甫　若林草右
石岡正司　足立春雄
西森花村
小林文月　多田一波
山分淑郎　土井蝶
藤田天風　糸本酔月
月原宵明　野本呑水
河村日濤子　直原七面山
大西野介　黒田笑泉
亀山晴峯　西口如川
科家蛮花　藤本濤年
蛮種美　黄瀬美秋
山根白星　西瓜平
橋詰東雀　渡辺孫揖
鍾瓜平　小田垣蝸牛
福島正則　福島鉄兒
藤田わたる　直原湖月
富岡淡舟　黒田久米女
石原伯峯　藤本茶々
山野星登　塩淡一路
吉村静一路　谷内草
東田晩鳥　福本翻骨
松崎五馬　太田木声
飯降白香　東田晩鳥
清沢柳清　松崎五馬
中内翠芳　飯降白香
布村南扇子　清沢柳清
西辻竹青　中内翠芳
榎南夏六　布村南扇子
長野井蛙　西辻竹青
伊藤迷宮　榎南夏六
林野甦光　長野井蛙
小畠無聖　竹田芦穂
田中遊星　阿万万滴
西田　いわを

新春を賀し奉る

編輯室にて

栄光に輝く一九五一年の新春を迎え
茲に謹んで各位の
多幸多福を祈る
——麻生路郎——

☆表紙は市北種三郎画伯を煩わした。

☆一九五〇年の本誌は内容の充実に於て量的発展に於て又刊行日の厳守に於て一大飛躍を示したが、一九五一年には更に内容の充実と新企画により、一段と躍進を続けることをお誓いする。新春号に於ける新企画としては散歩文学の雄山路閑古氏の創作「將軍娘」を発表し得たことの悦びである。その昔俳誌ホトトギスが漱石の創作を掲げて紙價を昂めたのに比すべきものとして大いに期待していただきたい。今一つは

☆リレー随筆の発表である。柳界の古家新道を拉して、その才筆麗筆を自由奔放に駆使していただくことにした。その第一陣をお馴染の東野大八氏にお願いして快諾執筆していただいたのが「くるまだんぎ」の一篇である。味読されたい。次の執筆者は東野氏の指名によつて石原青竜氏に決定した。今後バトンが何人えぶかは判らないが、指名された場合には本誌支援の意味で名筆を煩はしたい。

☆川柳作家としての異色、須崎豆秋氏の作品「旭町ジャングル」を別欄組とし、伊藤和三郎画伯の挿画を配することとした。次に、

☆詠史川柳人戸田古方氏の「につぽん」の続稿☆柳界の新人、藤本滴年氏の「川柳への愛情」☆雑筆としては法医学の権威浅田一博士の「語源探究」☆柳界の重鎮、前田伍健氏の「風流紙芝居」等々である

☆従来川柳不朽洞会の賛助又は洞友諸賢の玉句は誌面の都合上、「川柳塔」欄に併載したが、次号から「同舟近詠」欄を復活、別欄に掲載することゝした。

○

☆隣國が戦乱のために、多少あわただしい氣持もするが、終戦既に六年目の春を迎えただけに、敗戦当初に比して世態も余程落ちつきを見せて来たし、作品のレヴエルも漸次上昇しつゝあるので、往年鳴尾時代に本社で催していた柳談会を不朽洞会員のために開催し、川柳向上の一助としたいと思つている。詳細は何れ通知する。

☆本社なんば連絡所が既報のような事情の下に、一たん閉鎖したため各柳人との連絡上いささか不便を感じていたが、今春から、川柳雑誌社千日前連絡所を開設することゝしたので、御利用願いたい。処は大劇一つ南の小路東入北側べに牡丹。月水金の午後二時から五時まで。

○

☆石曾根民郎君が、多大のギセイを拂つて、「自選川柳年刊句集」を刊行した。この種の句集として、多少とも玉石混淆のきらいがあることはまぬがれないが、なか〳〵立派な句集である。主義や主張が少々違つていても、出句してその大成を期した各地の柳人たちの寛大さも、うれしいが、こうした句集を刊行した民郎君の人柄が、この難事業を遂行させる可能性を多分に持つていることも尊いと思う。何れにしても賞れなければ、臥竜点睛をかくことになるので、一人でも多く買つてあげて欲しい。本社でもお取次ぎする。（別欄廣告参照）

○

☆編輯室の机上には私の好きなシヤボテンが私を凝視している。そして執筆に疲れた私の眼を心を慰めてくれる。シヤボテンばかりは、執筆の多忙さから、少々うつちやらかしていても、颯々乎とした姿でいてくれるので、人に接しているようなくつろぎを感じる。

○

☆編輯の梨里が少しく健康を害したので、本号の編輯はPOEがした。（路郎）

日用品一切を網羅したアメリカ風の
DRUG STORE
ドラッグ・ストア…1階
身廻雑貨・日用品・薬品
書籍・菓子・テイスタンド
☆年中無休☆朝8時半—夜8時半
大阪・アベノ
近鉄
電話㉗6401

Made in Occupied Japan

最短時間で結ぶ
大阪—名古屋
特急
毎日3往復
近畿日本鉄道
特急料金 ¥600
上本町発 7.40 12.40 16.40
名古屋発 8.00 13.00 17.00

風趣豊かな
お好み食堂
おなじみの「食道樂街」七階
◇てんぷら◇とんかつ
◇中華料理◇お酒
◇ビール◇フルーツジュース
（外食券食堂）
甘藻茶屋「甘樂」開設
松坂屋
大阪日本橋

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第六巻 第一号
一冊 金三〇円（送料三円）
牛ケ年概算 金一九八円
一ケ年概算 金三九六円
（転載禁）
昭和五年十二月廿五日印刷
昭和廿六年一月一日発行
編輯兼発行人 麻生幸二郎
大阪市住吉区墨江丁目二五番地
印刷人 麻生路郎
大阪市住吉区墨江丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話日本橋 大阪 七五〇五〇

募集

課題吟募集

役得（十句）西尾選栞
赤字（十句）土井文蝶選（一月廿五日締切）
PTA（十句）村松夢裡選
割勘（十句）木下幽王選（二月廿五日締切）

毎号募集

近作柳樽雑詠（廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（廿五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。